

大坂穴探  
寛

特41

115



027293-000-9

特41-115

大坂穴探

堀部 朔良 / 著

M17

ADJ-0036





卷之三 笑史編次

大坂市探完

思天堂書院



大阪穴探引

浪花自古繁華之區也。故世人並之。而京號為  
 三大都會。矧方今百物之開進乎。然自飲食自  
 衣服。東西猶異。其好尚何。是所謂習俗。不可遷  
 奪也。頃者米巒笑史著大阪穴探。意匠良苦。讀  
 者能味之。則將有釋然了者矣。

甲申春日

洗竹居主人識



弁言

予の未だ液華に未らざる時や所爲く液華の古より武と  
 用ゐるの地たり豊太閤茲に城池と稱へ都府と開きしよ  
 り以未連綿繁昌今日に至れるの地なきは古昔の遺風の  
 今日一存じ其の人情風俗習慣好尚が自ら尚武の風と帯  
 びて人の活潑に地の爽快に予として頗る快活勇壯の思  
 あらしむべしと念々液華と慕ひて己まを問と偷んで此  
 の地に遊ばん事と企てたるの實に數回未だ其の志と果  
 すと能はざる者ありしに幸ひなる哉一昨年政治海の風  
 波の一濫一激主義の爲に政黨と樹て會議と催まの必要



まゐるに至り地と神聖の王城に卜して同志大に會まるの  
機運となり予も亦其の末班と汚して西京に赴けり而し  
て浪華は是れ西京と相距る遠らざるの地なれば途次  
之に遊びて年来の宿志と果さんとせり然るに人あり予  
に浪華に留まらんと勧むる者あり素より慕ふ所の地  
なれば豈に敢て辭せんや況んや我主義と擴張し我宿論  
と述ぶると得るに於てとや會果て京と辭して浪華に  
來る山水の美に以て予の心と樂ましめ城池の豪に以て  
予の目と驚し年来の宿願茲に足りて欣然措くと能はむ  
尚ほ其の風と觀俗と察し果して予の羨慕の如くなるや

否やと極めんと欲し人に交り物に接し勉めて其の人情  
風俗習慣好尚と察せんとし荏苒經過茲に一年有餘なら  
んとす而して慨然言ふ所と知らざるものあるに何ぞや  
是れ其の希望に反すればなり嗚呼古の風は蕩然地と掃  
ひたる乎用武の地何ぞ尚武の精神と留めざるや人の遊  
息ある事の不治澄なる都會の地にして誠に驚くに堪へ  
たり況んや其の政治思想の振らざる有志と以て聞ゆる  
人と驛とも或は殆んど政理の何たると知らむ政學の幼  
童に齊し其の俱に語るに足るものなれば新聞記者と  
代言人と其の他二三の先輩あるに過ぎざるに望みと共



にざらんや既に筆と投して政談と廢し袖と拂つて故園  
に去らんとするもの數回而して未だ之と斷する能はざ  
る者の蓋し故なきにあらざるなり抑も志士の本分の唯  
眼光と政治の一邊にのみ注ぐ可きにあらむ世弊の矯む  
へき者風俗の改むべき者之と眼界に放棄し去るべきに  
あらざるなり故に予や經邦の筆あるにあらむと雖ども  
亦矯弊の筆なきにあらむ浪花の人情風俗習慣好尚にし  
て曲れるの矯め難あるの改めんとして欲し隱微と許さ缺  
點と擧げ極論審議敢て憚らざらんとす是れ予の正義論  
論と好みまるに由るあり而して今茲と穿ち缺と擧げ極

論せんとする者誠に少なるらむ其卑近なる者に就きて  
之と云へば市街の結構男女の風俗家屋の構造飲食の調  
理衣服の仕立言語の音調四季時々の禮節より觀花納涼  
觀月觀雪旗亭音樓劇場奇席觀物俳優藝妓娼妓幫間の遊  
戯に至る迄苟も世弊たり風俗に害ある者の顧慮忌憚を  
る所なく現凹を筆秃するも尚ほ巨つ論撃と止めざらん  
とす是れ志士の宜しく勉むべき所にして予の素より望  
む所なりと雖ども眠れるる如き浪花の政治社會も亦論  
をへきもの決して少なしとせば時事の問題日に思想と  
刺戟して已まざるが故に未だ是に充分に筆と下をと能



のざりき然るに我友米密笑史頃日大坂穴探と題する戯著あり以て予に示さる是れ浪花の人情風俗の微と穿ち穴と探り言と諧謔にし筆と婉曲にし順と解き腹と抱へしむるの間亦諭する如く諷する如く知らむ識らさるの中自ら警戒の言あり締弊の語あり言外無限の味ありて存ぜり遠かに之と見れは杖の短刀直入の論の如く痛快ならさるものありと雖とも愚父阿婦として自ら反省の心と起さしめ雜客野人として自ら猛察の思あらしむるに至りては遙かに之に勝るものありと云はむんばある可らむ然らば則ち予が極論審議せんとする所のもの

の既に笑史の諧謔の言婉曲の筆と以て盡せりと謂ふべきのみ予豈に其素望と達したると喜ばざらんや而して此の穴探の能く大坂の穴と探り盡して微に涉り妙に入り警戒の意の言外に溢れて必むや締弊の言たらんと知るべし爲に陋習の改まり汚俗の脱し設令古昔の遺風は今日に存ぜむと雖ども人の活潑に地の爽快に遂に予として頗る快活勇壯の感あらしむるに至らん果して然らば予の浪花に遊びて却て失望の感と起したるものも忽ちにして之と回役し愉々快々長く浪花の人となるに至らん歟今や大坂穴探と看聊か所感と記すと云爾



明治十七年五月

巖村 堀江 正

緒言

世の人動もすまじ。毀と聞て之と怒り。譽と聞て之と喜ぶ。故に忠言の耳に逆ふ。實に人情のうたてくして。木の樹の直ぐなるより。松の樹の曲まると愛す。左の去りながら其前に。譽あるより其後。毀なきに。孰若ぞやと。古語にも云へる如くにして。濫りに毀と聞ておぼと怒り。濫りに譽と聞ておれと喜ぶ。うたてき人の果いつる。悔て返らぬ身の榮枯。盛衰乍ち其地と換る。味氣なき世の行末と思ひ越し方の覆る。前車と見て。後車の戒をもなきるしと穴



探第二十項と綴るに在ん。

于時明治十七年四月中浣

編者識

大阪穴探附言

一此編の專ばら事實の非曲を直言し又は謬言を去るものにして我が都下の爲に渾て將來の進歩を謀り兼て又た文則の域に急進めらん事を促すの意に出たるものと知らざるべからず

一此編に記するの外にきて猶ほ遺漏あるの憾み無きにあらざるべしと雖ども見聞の未だ届らざるものは素よりこれを記するに由なく且つこれを記するも其益めらざる考へしものゝ渾てこれを省略す

一此編に記するの内にして猶ほ讀者の見て以て缺漏脱離の憾み無きにあらずとするもの甚なからざるべしと雖ども是れ一見聞の未だ届らざると一は文意の拙劣なるよりこれを掲表するを能はざるものとあるべし

一此編各項の順序に就ては讀者或は其前後あるを疑はる、事あらんも知るべからずと雖ども是は編者の別に見る所ありて殊更に其順序を前後したるもあれバ敢てこれを



谷やひると勿なれ  
一此繩このへんの揮まて專まばら俗ぞく体たいを失うはざらん事ことを勤こめたればこれこれを讀よむもの一見ひとみ以もて其意そのいを  
解わかし得えるに苦くるまずと雖いども蓋たが玄げん其野郎そのやろうに於おて其その強つよ固こなるを登のぼりさるべし

大坂穴探目録

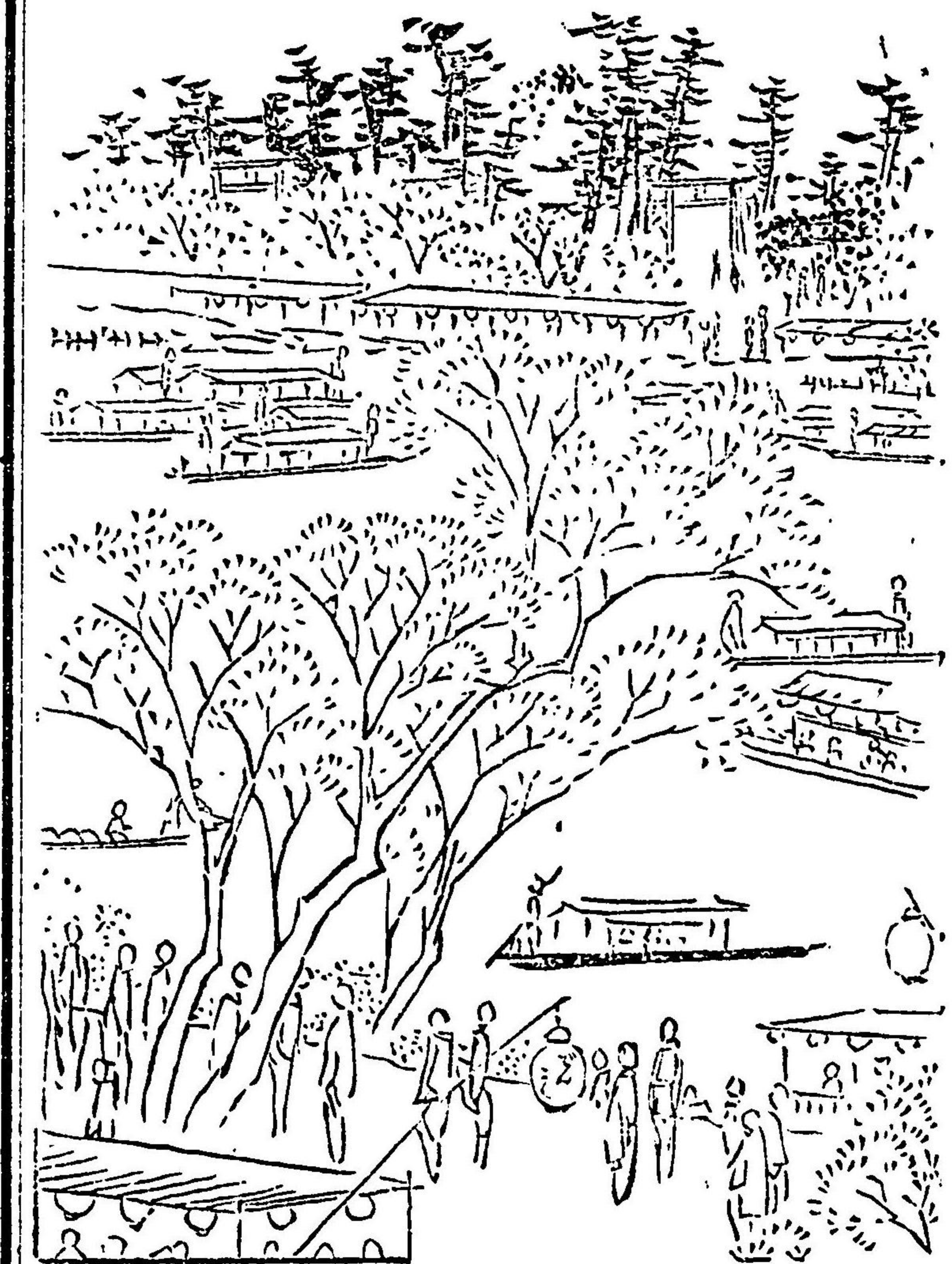
第十一	角紙	二十丁
第十	天長節	二十三丁
第九	納涼實況	二十二丁
第八	觀花實況	十九丁
第七	混堂	十八丁
第六	劇場	十二丁
第五	新年實況	十一丁
第四	女子風俗	九丁
第三	男子風俗	七丁
第二	人情	四丁
第一	市街	一丁



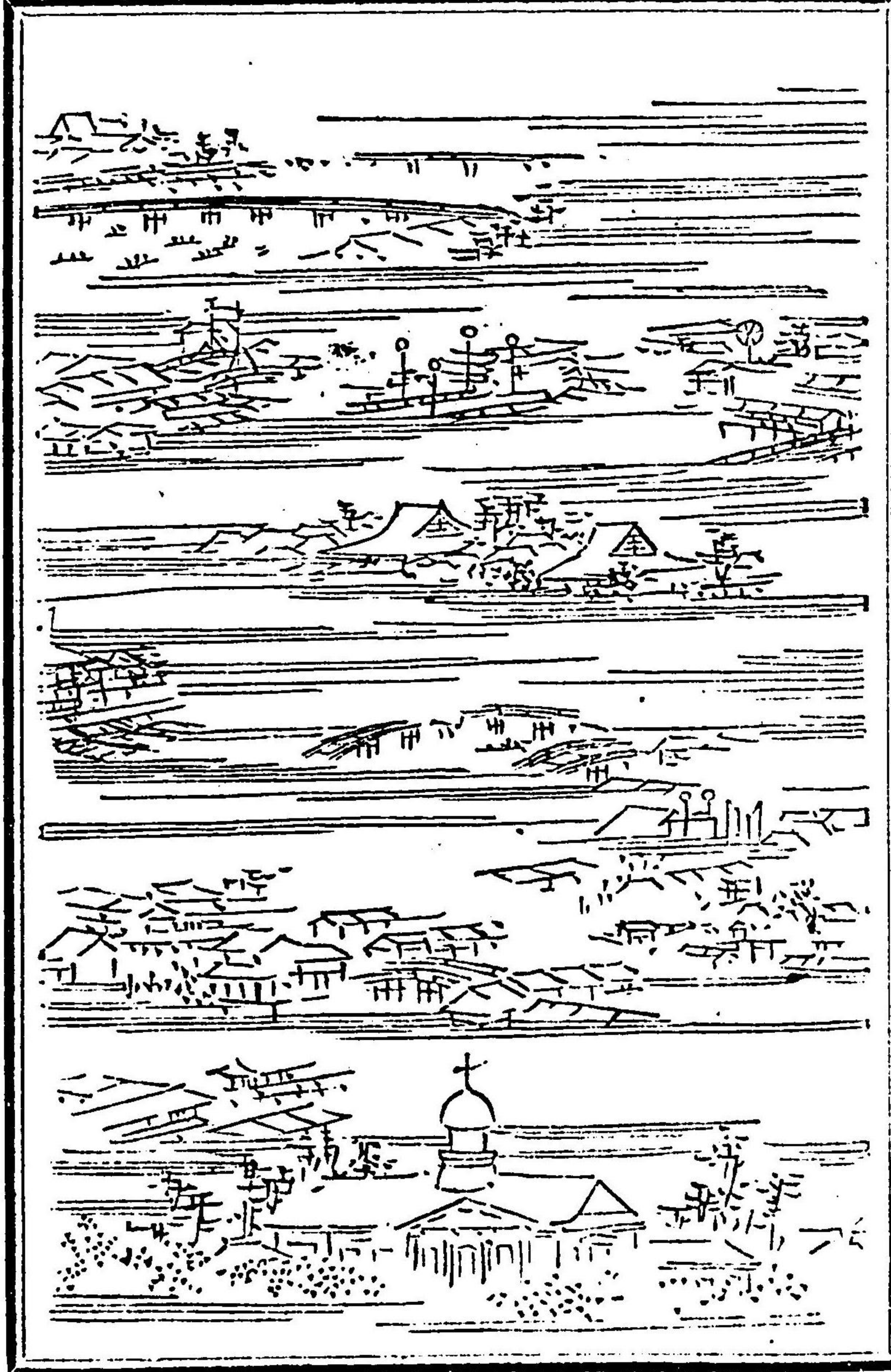
目錄終

第十二	三百奴	二十七丁
第十三	寄席	二十九丁
第十四	潑材	三十四丁
第十五	觀物	三十七丁
第十六	花街	三十八丁
第十七	祝融實況	四十五丁
第十八	密賣婦	四十七丁
第十九	歲暮實況	四十八丁
第二十	襟感	五十丁

櫻野宮

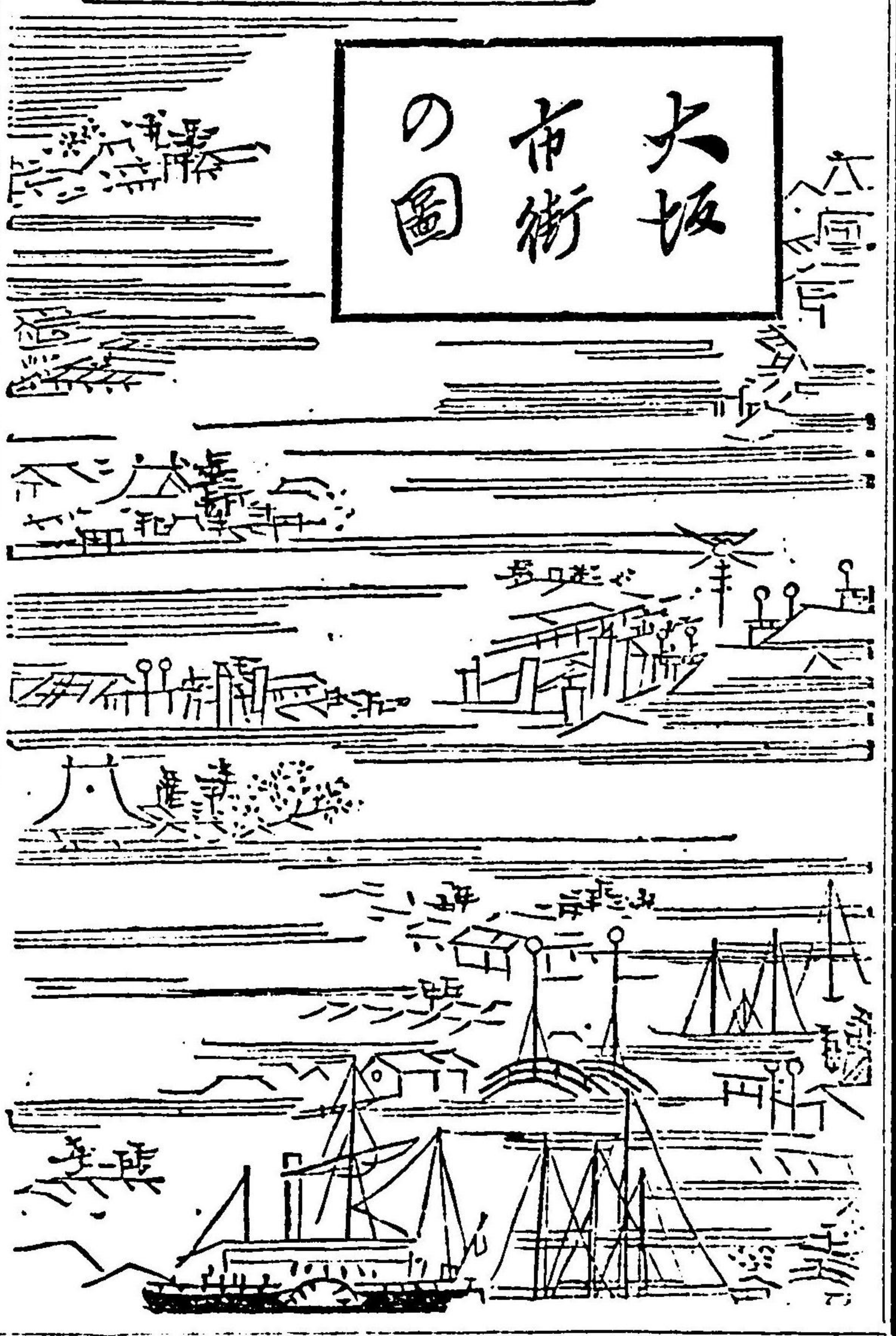






大坂市街の図

大坂市街の図



新編 大坂市街の図





御城馬  
場七月

大坂穴探

第一 市街

大坂 米巒笑史編次

大坂の地の先づ一見して方一里半許とす市街の是を東西南北の四區に分ち郡の相接するもの是を東成西成及び住吉とす開道東區は町數百五十七にして戸數一万九千八百九十六此人口六万五千八百十二人南區の同九十七にして戸數二万七千八百八十一此人口八万五千八百五十人西區の同百七十五にして戸數二万九千五百五十六此人口八万七千二百四十人北區の同九十四にして戸數一萬六千八百八十七此人口五万二千八百八十四人なり此總戸數の九万二千八百二十にして惣人口の廿九萬千八百八十六人なり但し此調査の今年のものにあらざれば蓋し今日の戸數人口の亦た是より増減盈縮なきを能はず然れども是を東京に比ぶるに纔に三分一に過ぎざるを未だ以て彼の規模宏大とは云ひ難し最も市街は人家稠密往來の肩摩袂擊其頻繁思ふべく又た一目してこれが大都會たる事を知る



殊に古昔の難波津の舊號ありて北の方を天満と云ひ北野。曾根崎。堂島。中ノ島の名あり中央を船場と云ひ南を島ノ内東を玉造り。上町。高津西ノ土佐堀。江戸堀。京町堀。海部堀。新堀。阿波座。鯉座。薩摩堀。立賣堀。新町。妙場。長堀。北堀江。南堀江或ハ雜魚場。江子島。寺島。安治川。木津川等入船の區別あり殊に安治木津の兩川口は常に帆橋林立し尙ほ其出入絶てし事ぞなし千載集に賀茂成保の詠る歌とて

霜かれの難波の芦の若々と明るる湊に千鳥啼くなり

又た新古今集に西行の歌とて

津國の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風渡るなり

と載せて其古への形状と想ひ見るに足れるものあり今も市中到る所船便利よく殊に河川の多くあるが中に就て其最も大なるものは彼の大江岸邊より今の大江橋のあきたまでとす但し大江岸と云ふハ天満橋南詰今の八軒家の濱あり是より南の方一堆の丘山にして西北は大江ありと一本に見えたり又た此邊すべて夏の夜に蚊を見ぬハ奇しき事

なり後抗遺集に真還法師の歌とて

わたのへや大江の岸にやとりして雲井に見ゆる生駒山かな

今の大江橋を一名渡邊橋とも云へりとかや今は別に其橋あり却て説く大坂の名は上古開えず接するに大江坂の略訓なり大江ハ難波江の一名おして仁徳天皇第一の皇子を大江伊弉本和氣命と申し奉れり受禪の後ら履中天皇と稱し奉れる大君なり此時大江の號初めて開けりとぞ明應の頃蓮如上人の文章に攝州東生郡生國魂庄内の大坂とわれバ當時ハ封境廣きにのわらざるべし今は大坂の生國魂と稱して昔に反す上古ハ道臣命當國の造にして景行天皇の御宇には大伴武日連允恭天皇の御時に大伴室屋大連社稷を輔翼し叛賊星川皇子を平け顯宗帝を天嗣に即け奉る國人悦ぶを限りなし大寶年中に大伴安磨養老に大伴牛養和銅には大伴族人大伴山守天平に大伴犬養大伴家持等次第に此地を領し自然と大伴の名蔓延て大伴の御津の濱或ハ大伴の御津の泊とも和歌などに詠り其領主の古蹟は大江岸の國府町なり天正年中顯如上人石山の御



堂退去の後、豊太閤築城の盛みあり、尋で諸侯茲に藩屏を構へ千門を開く、交易の買人四衛に滿て繁華となれり、國初より凶海の浪穩かにして、枝を鳴さぬ御代なれば、諸國の米穀、材石及び和漢の雜貨、こゝに若船して朝の市暮の市とも、街に歸しく、寔に日本都會の要津なれば、縦横四衛の賑しき事、海内に冠たりと、本文に見えたれども、這は是れ最と古き昔語りにして、中古稱へしものには、あらざ、徳川氏覇府を江戸に開きたる後は、都會の繁華は六分を彼地に輸送せり、世し大坂は船舶出入の便あるに、且つ西南地方を扣へたるの中、央なれば、同地方の産物のすべて、此地に輸入し來り、相場の高低を定むる特權を自然に占むるに至り、遂に東北の物産も、此地にて評價を下す事を得たるが故に、此地を以て日本全國の商業地と稱せらるゝ、に至れり、米相場の高きは、日本全國、悉く堂島の立相場を以て、恰も基礎と云たるもの、如し斯れば、從來繁華の價値と落さず、又た東京に次ぐの一都會とは稱え來れども、今や海に漁船あり、陸に漁車ありて、數年を出ざるに、東京大阪間の鐵道線路を敷設せらるれば、向後は商業の權も、或はこれを東京に譲らざらざるに

至らんか、夫れ大阪の地の市街道路の狹隘、穢雜にして、且つ貨物の運搬に不便あり、従前は海外との貿易も、無く、智識人文も、未だ開けざりしに、ど多少の不便、多少の不都合は、これを忍び、これを堪へられざるに、あらざりしかども、今日の如く、活動社會に立て、廣く海外と通商互市を開かれたるに至り、隨て運搬の便、陸に海に、彼れが如く、開け、其駛走、飛禽も、畜のみならず、至りては、逆も、斯る土地柄にては、活潑なる事業を執ると、能はず、第一道路の狹隘なる、往來の人の不便なり、危険あり、西より人力車が來て、東より荷車が往く時は、孰れか、其一方にて、これを除ね、通れず、南より小荷駄馬を牽き來て、北より馬車が、馳往く時の、場所依りて、全く相過ると、能はざる所あり、左れば、斯許りの都會にて、市中馬車の往來を見ず、開化の今日に在りて、殊に、此便あるを、知れども、これを用ゑると、能はざるの憾みあるは、大阪に取りて、の瑕、壇きり、次々家屋の構造を、云んに、家並び、店舖の、格好、申分、段々あるが、中にも、空氣の流通を、能くし、陽光を、充分に、取れる家、極めて、甚さく、其、僅に、之れあるの、割烹店、なら、では、青樓、若くは、旅館、屋等、奇り、其他は、恰も、消え、残れる、行燈、なら、では、臆



月夜の晩の如く破明としたる家のみ多し殊に斯る繁華の都會にも似ず何となく家措の見悪きは儉しさを旨とすれば徒らに美を飾らぬとの意なるべけれど海外人との交際を始めし今日お在ては是等も亦た一つの瓊璫となれり破れたる襦袢を着て綾羅錦繡に飾れる高貴の方と立ち交りて耻かしと思ひぬもの子路其人の知らぬを恐らく今の世には先づ之れ無るべし一寸した事でも小汚なき店へ腰を掛て澁茶を飲んより小奇麗な店で同じ澁茶を飲む心持の好さの人情なり左れば家屋の見よからぬの畢邦人と互ひに商業を爲すにも亦た不都合なり其話扱置從來此地の道路の平坦にして且つ清潔なりしは他に見ざる程なりしが近年に至り人力車の出来て往來其繁さを増せる故にや漸く其姿を失ふに至れるは歎はし但し市中の路傍又は橋の本に便所の設けあるが至つて兎末のもの、み未だペンキ塗の能く汚穢を秘せるものあるを見ず且つ大便所の設けなき土地の風俗とて往來でいされをせぬと云ふ譯かざるにても他國より來れる者のこれが爲り往々おして困れる事ありとかや困れる事に次で婦人の立尿と車夫の腰切掃袴とい

真晝間の往來最中では誠に見悪し愛に又た衛生上より觀察して最も欠点ありとするもの水なり井戸の水は常に鉄氣を含み殊に其甚だしき濁江の水も昔ならねば是を以て飲料には供せずで只雑水にのみ使ふなり底で飲料に供するもの川水なり左れば何れの川邊にも水船を繋ぎ置き明禁をもてこれと清す清るを汲で飲むものなり土地の人おれを上水と稱ふ焉んぞ知らん其川上若くは川下にて糞取船の船頭常に遠慮會釋も無く桶を洗ひ汚れと水に澱ぐ苦々しき事のあるをオット是れまたり現今の警察殿に能くおれを誡めらるゝ事なれば決して斯る所爲は無き筈とぞ何れにせよ話しも斯う下廻りに成て來ては仕舞ゆるドリヤ次の條に筆を運ぶべし

第二 人情

人情といふ人の情と云ふ義なれば孰れの國にても人情に變れる事無き筈なれども邦土異なれば従つて人情も亦た變るなり世俗に人情杯と一口に云へるの誤れり是を五大洲に問ふに五大洲亦た果して其別あるは尙ほ黃白若くは其他の人種あるに異ならず例へ



巴黒色人種（やくしやくじんしゆ）の早く春を解すれども白色人種（はくしやくじんしゆ）の否らず又た西洋諸國（せいやうしよこく）に行はれて以て善とする所（ぜんとするところ）のものも東洋諸國（とうやうしよこく）にて未だ取るべからず實に東西其洲（たいせいしよ）を異にするのみに止まらず我が日本國內（にっぽん）に於ても亦た然り例へば東京と大阪とは大いに其人情を異にす豈に（あやう）畜東京大阪間（ちくとうきやうおほさか）のみならんや京都と大阪とに於るも亦た然り夫れ邦土の異なるよりして人情の斯くまで變れるの而故ぞや是れ寔に風俗の轉換るに職由す而して人情風俗の常に相待て離れざるものなり爰に其近き例を示さん（あゝ）に先づ東京と大阪との何れが暖くして何れが寒からんか蓋し東京の寒く大阪は暖かなるべし而して暖國に住る者は資性免かく軟弱にして事に觸れ物に障り或は畏る、の意あり之に反して寒國に住る者の少年と雖ども萬事に勇る氣象ありて膽魂据れり是を委しく云ひ解ん（いへん）ふ彼の寒き時は人身は何となく緊縮れども暖き時の免かく體骨に馳緩を覺ふ左れば酷暑の砌りは人々何事も棄置て只或は午睡を貪るもの多し斯て秋風（あきかぜ）のそよと立ち身に涼風を覺えれを朝寐坊が正午で眼が覺め透て、起ると何となく俄に暑中棄置たる事と思ひ出し急に取纏めに

着手し是より追々寒氣に向へる人の心も自然に緊縮り氣に勢が附き來て職事を爲すにも張合が出ると云ふものあり是れ大阪東京間の人情其別あるを知り得べき理由なり庶で大阪の人情はと問へばさへて浮薄なり淨薄也（じやうはく）ゑに心汚なく只利を見ては是れ走り飽まで取る事に日が暮ぬ先き眼が暮れ一寸前の暗の世に節季を的の貸過しの越中輝と同様向ふから外れ箭の催促を遣て見ても鉄砲玉の音に聞く大慾の無慾に似て果の蛇も取らず蜂も取らず損て徳の世間（とく）にあれ徳（とく）て損（そん）ども云ふべきか是等の類は常に得てしてあり這の全く人情の浮薄にして且つ心汚なきの致す所ならんかと笑史此事の人に聞えて憎まる、とも知らず頻りに穴探して居る所へ先生の在宅歎と云ひつ、肆焉入り來る者ありト見れば隣家の翁（おきな）かり此翁元來侷脱の大阪産（このおきな）おて世間を見ぬ昔々堅氣の云ひ、頑固翁もゑ折惡し道は仕損じたり若し此事の知れもせばと述て、取隠さんと急げば廻るとやら遂見咎められ是サ先生何も吾儕が來たどて左様隠す事も無い花街へ道る内緒の文じやとて吾儕が口からの饒舌のせぬ併しお樂み筋で羨ましい事じやと云ふ



にぞ笑史痛く無き腹を探らるゝが否さにイエ〜中々左様云ふ事ではふりませぬと云  
 せも敢ず翁の詰り寄せ来て然らば見せても宜らう。アモ是は些許りの矢張り花街であら  
 うがサ。イエ決して左様ナ。夫じや隠さずに見せられよ。サアそれの。見せる事の出來ぬ  
 か。サア。サア。サア。サア。何と先生返答の何じや杯と演劇の臺詞もどきで  
 詰られたれば今更へし隠しに隠す事も出來ず是非に及ばずとて取出して示せり此時翁  
 は猶は半信半疑でお文も斯う念が入て細く書く様での杯と云ひつゝ、宴時の間だ見て居  
 たるが俄み笑顔と變じ先生是は馴子の方へ道る文での無くして大阪穴探と云ふ先生の著  
 作物も此所は大阪の人情の斯々なり云々なり杯と己がじゝの過書して大阪産の氣を  
 悪うするのじやがソリヤ餘り聞えぬぞや何ぼ大阪でも斯な者ばかりは居へん好し一人  
 や二人三人や四人有たればとてそを大阪の人情どの云はれぬ云へば世の中に誤聞を傳  
 へる者あり又た理窟に合ふか合ぬか知らねど人の情は人毎に違ふもの決して先生の  
 筆の如く大阪の人情東京の人情又た大きく歐羅巴の人情亞細亞の人情杯と云へる譯

のものでは無し近年の舶來の理窟が我國へ居候に來て我々の様な者が口を利くを齧弊  
 頑固翁が杯と一口に下りて一体此奴らの理窟の生意氣と云ふもの仮令西洋が何で有  
 らうとも我が日本は日本なり大阪は大阪昔しより是で立通して來たのじやや何れも無  
 理遣に他國の眞似爲るには及ばぬのみか授智恵の毎も禿やすし又た凡そ世の毀譽褒貶  
 の人々其意見を異にするに出れば東京人の見て以て是なりとするものも大阪人の見て  
 以て直ちに同意すると能ぬものあり然るに大阪の斯な風なり杯と好加減に決て云ふ  
 は甚だ了簡の狭いと云ふもの申さば世間見ずなり（夫子自ら謂ふ）世間見すが云ふ事は  
 取て以て争ふべくも足ねど斯まで無茶苦茶に大阪を悪く云はれては何ぼ氣の好い者で  
 も腹が立なりいかに先生これを刃で取消すや若し取消すしてこれを公に梓に上さば吾  
 儕は大阪全府の人に成り替て刑法第三百五十八條惡事醜行を摘發して人を誹毀したる  
 者の事實の有無を問す左の例に照して處斷すとありて其第二項に書類圖書を公布し又  
 は雜劇偶像を作為して人を誹毀したる者は十五日以上六月以下の重禁錮に處し五圓以



上五十圓以下の罰金を附加すとのれば困て以て告發して其宛を雪がさるべからず平生の仇親の仇親親ナト手酷かの知らねと吾儕はさう遣る積りじやがと飽まで立腹の体に見えたれば笑史も少し閉口したれど何とかわ茶を添さるとやと先づ荆妻に命け有合せでの一杯を附けさせ扱て旦那何の無ければ魚酒一献まゐらせたし只今のお詫の酒の上で緩々申しませう先づくと進むれば兼て上戸の聞え高き翁なれば此支度を見て急に笑坪に入り是の心配痛み入たる次第折角の事もぬお辭儀も何とやら杯と前との急に打て替ての世事たら〜一杯一杯又一杯と追々進めし酒の酔が廻つて來た頃と覺しきとき旦那最う一献いかいでふります。イヤ最う充分此上飲べ酔潰れる許りドリヤお暇に致さうと立掛れば笑史今詭言をせねば酔が醒めたらと考へマア〜之間と無理に引留め時に旦那先刻の立腹の何卒此限りに致してと云ふを翁の終まで開かず左様な事の如何でも好い先刻の一寸と腹も立ては見たもの、斯う酒を飲で篤と考れば先生の云ふ所も最もじや好し少し位の間違があればとて誰も腹を立て手間費を潰して彼是

と眞面目に成て云ふ馬鹿も有るまいと云ふにぞ其儀ならば書ても儘でふりますか若し又た他方から立腹して参られたとき毎も〜魚酒一献をと出と譯には参らず酒が無ければ考へが附ぬもゑ告發だ杯と云ひれて困りまそが底の如何なものでふりませうと念を推て問返す時翁は小脇を向て浮薄所爲と噴嚏しつエ、何所にてか酔さするものがあると思えたり蓋た悪口であらうと其儘胡魔化して早々立歸れば笑史また之を儘めるに由なかりし

第三 男子風俗

浪華男の風俗とて美服を好す稼穡を勵み天正の末豊太閤在城の後の武雄の氣格を失はず意氣慷慨俠流と許へ三尺の童子も頼んで引べからずの義英あり古へより何某の俠客と云ふ輩ら人口に膾炙す萬葉集にも高安王の御歌とて  
 我か衣を人に着せそ綱引そる難波男の手にのふるとも  
 と載せたり這は是れ大阪産の名譽にして未だ他に對ひ秋毫も耻ざる所なり杯と己が田



に水ッ涕を軟りく頻りに誇氣に語り居る翁の傍から口差する男のあり扮装形態言葉遣ひは東京産と見受けたるがオノ親父さん少し待ナ浪花男の風俗とて美服を好ぬとか云ふがソリヤ何代の事やらん見も知らぬ昔話しは聞くも下さらねへ併し今の大阪で美服を好ぬとは不景氣が効たで紙幣が無いからの事さるべし又た稼働だわ小唄だか知らねへが勵むと云ふ事は今の言葉で正談く云へば勉強と云ふ事だが大阪産の勉強どの近頃耳新しい賞讀過た言分夫のみならず太閤が此城に主公と爲て後の武雄の氣格を失ひぬ杯の聞て呆れる又た俠客とては斯々とそれく朝比奈當兵衛より外に誰も知れる程の者の無し三尺の童子も頼んで引ねへか知らねと引た所が小荷車ぐらゐる左様な事を大層も無い事の様に話す程でも有るめへ杯と横鎧を入られ翁は少一勃とせまにやモく貴郎の云ふ事の油紙か鉤盾へ火でも附た様にペラくくと饒舌るもゑ一向に譯が分らぬ又た大阪の不景氣で紙幣が無いと云はしたの片腹痛い今の不景氣の日本國中何處も彼所も同じ事珍らしいから殊に大阪に紙幣が無いどの何を證據あるか無いか話して

聞せう聞かされ先づ第一大阪の金満家の鴻池住友の五代を云ふ方ありまだく其上に造幣局と云ふものが有て何萬何億でも金銀を鑄造します是等は何處へ往て話しても笑はれる氣遣ひの無い誠實の美譚其話切置爰に又た大阪に昔しより忠孝の道にそれと聞えたる最と譽れ高き者のあり元祿七年の頃に北新町の鐵屋が家に土質七兵衛又た本町三丁目に平兵衛傳兵衛の兄弟元文四年と云ふに堀江なる橋町においち。おまさのおとく。初五郎。長太郎とて十六年を頭に十四年八年六年等の幼兒が父の太郎兵衛とて羽州秋田通船の居船頭が犯せる罪ありて既ち處刑に行はるべかりしを聞て我等五人父の命に代り申さばやど切に乞ひ出しかば父も今は風前の燈。晝待つ朝顔の露の命よりも尙は危く繋ぐべくも見えざりし玉の緒を此五孝子の爲に繋ぎ得て不思議の命を助かりたり又た天明五年に天満岩井町に住に志籠細工職の熊治郎其齡十四年弟馬之助其齡十年と云ふの養母に事へて至孝あり天満一丁目の播磨屋源兵衛妹おひめ弟大吉妹おとめ弟源藏妹かかねのおと、ひ六人は實に孝貞おして殊お母を撫育し家内



睦まじく稼業を勵む事他も及ばざる程なりしとて名高し寛政四年には天満北森町の山本儀兵衛が下男長兵衛と云へるの殊に主人へ忠心を竭し同五年には西高津新地九丁目吉松の兄弟ありて母に事へると君に事へるが如し同年酒邊町に源兵衛と云へるありて父母に孝養を盡すと實に際り無し又た同年立半町に龜市。おみよのおと、ひありて共に能く両親に事へて至孝とぞ聞えし同七年には平野町の爐屋が下男に善太郎と呼ぶ者ありて三代の主人に忠勤して且つ母に至孝なり又た同年の事かどよ御池通に伊勢屋佐兵衛と云へるありて主家を相続し忠孝の専ら高かりし是等の皆な官家の高聞に達し遂に台命ありて御褒美を賜はりたると一本に見えれば知らぬ人の無し之を是れ難波人の風俗とぞ云ふならしと最と誇氣に語るを此方の男うち消て又たしても古い話を擔ぎ出すそれ忠孝の人たる者の言の務め爲さでは叶はぬ當然の事それを事珍らしさうに誇つて話す大阪産の腹の中が見えて可笑し第一今の如に忠孝とならべ立て云ふもの、其裏にいたまた驚くべき惡漢のあり是等を算盤玉でパチンくと弾き差

引勘定を附て見たなら善が三分惡が七分で商人なら割に合ぬとか利潤ぬとか埋らぬとか嘆くべし第一我等が目撃た所で大阪産の風俗とて兎かく遊女事を好み花に月に酒肴を携ひ或は妾或は妓中には娘子供を携へて屋の花見と云ふ丈けもあれぞ汗のまた至つて稀れなり去りながらなべての風とて吝嗇な遊興を爲すの癖あれバ不粹さと甚だし殊に此土地の風俗とて淫奔に耽り左れば昨まで綺羅に賣練れるが今は襦袢を纏ひ巨萬の身代と聞えたるをも何時しか失ひ羽生の小屋のいふせき住居に一生を暮なく終るもあり斯く零落しては兼て氣概の無き土地の人物なれば挽回の策も得立ず又た人間が一体に愚圖々々として發暉とせねば所業が遅く何事も今が今とは往す兎かく一日と後れ二日と延る弊あり爰に最も宜しからぬ惡弊あり諸商人等の狡猾是なり昔しは是等を指して商賣に賢し杯と賞たれど今の世は理窟社會ゆる虚事詐爲をもて人を欺かる事を忌む大阪の習慣とて此風今に失ず殊にまた人となり多く傲慢自負の色あり世事至つて惡し只利を見ては權門に媚を呈し阿諛を賣る而して其表裏反覆は恰も掌を返すより早く



輕躁浮薄更に焉より甚だしきと無しとの世間の輿論ナンと是で大阪産も立派な口ハ  
利れめへと飽まで憎まれ口を叩きたるにぞ定めて大喧嘩にでもならんかと該他の者の  
愕然して居たるお翁の何思ひけん其ま、嘿然として答へざりし

第四 女子風俗

浪花女の風俗ハ大略京師に似て少しく鄙を兼たり千載集に藤原清輔の詠る歌とて

難波女のすくも焚く火の下こかれ上つれなき我身なりけり

又た續千載集に俊成卿の歌とて

難波女の若のまのやのまのす、き一夜のふしも忘れやりする

杯と載たるを見て知るべし又たなべての風俗ハ殊に關西地方の習ひとて淫奔甚だしく  
穴恐しき事ども多し是れ併しながら季候温暖なる邦土に於てハ人の情慾早く動て早く  
謝し從て智力も亦た早く成熟する由に聞けバ其淫奔の甚たしきハ殊に我れ自からに  
要むと云ふ事由にもあらざるべし而して所謂る天理自然にして造化の然らしむる所

なり去りながら智力の早く成熟する風あれバ男女相投じて貴し然れども女子にして兎  
かく遊ぶ事を好み或は花お狂ひ月に浮る、風あり猶ほ且つ娘子供にして酒を飲み醉に  
紛れて巫山戯出し或ハ主なき子を孕み情の愒を後に残すもの問々あり斯れば花柳社會  
の蕪娼妓には大酒に溺る、もの多し左れば嫖客にも果は呆られ何時しか三年の戀覺て  
時ならぬに秋風の立ち夫とい岩橋の中絶ていなの笹原をよどだに音信なくぞなんぬ是  
れ實ハ此國の人の薄情なるに依る事なれども此方もまた薄情もゑ動めぬが瑕瑾なるべ  
しと箇様に欠点を探す時のまた色々な事の顯れ出る中にも殊に可笑さハ家婢の風  
俗にて頭髮に下女と云ふ看牌を掲げ出すもの、如し一体此地の人の人々を爲り傲慢自負  
の色あれバ雇人を見ると恰も昔時の武家が其藩主に事ふる如く生命財産共にこれを委  
ねたる者と一般視するの過より出たる弊と思へる是を再言すれば人を雇ふの道を知  
らずと云ふものなれども唯り怪しむべきは彼の家婢が其身の自由を束縛せられて却て  
これを悟らざるのみならず普く世人をして一目その何誰の家婢たる事を知らしむるを



甘んじ居る事なり嗟咄笑止と云んも悪かなり若し文明國の人これを聞ば其野蠻の習俗たる事を歎かん最も近時は漸く其弊を悟れる者あるに至りたれども猶ほ其今日に在る愚あからざるの以て大阪の人智未だ發達せざるに依れる事を知るべし杯と笑史がじ、の筆を執て取り止も無き事どもを書立て居る所へ訪ひ來れる人ありし此人元來口善惡あければ此稿を見るが否や忽ち口添して云ふ先生大阪女の穴を探さば一日も猶ほ消すに易し措くべしと併し書懸の止は何とかに成るも知れねばその藥の代に僅少ばかり申さうなら下女の暫くお預りに致し今度はお家さんとまませう其お家さんとい誰も知る通り言ひ一軒の副統領家内の事は亭主と宜しく相協議し家事向萬端能く取引つて治め往く大切な器械と云ふべきものなり若し其器械が狂ふ時一家の經濟是より紊れ遂に何如ともすべからざるに至る左れば夫婦は人倫の大綱とも云へば俗にお家さんを呼で特に内實と云ふならし其内實のお家さんが道からぬ戀路に陥迷ひ楚雲の雨に濡つ、巫山の夢を結ぶに都合の好い家がありこれを益屋と云ふ俗に野合臺なり有ら

う事か有るまい事か底で人知れずの乳線合而も時刻の夕方より宵までの間に其お家さんは湯屋に往く買物に往く杯と胡魔化して家を抜出るとの事なり是が此地の風俗の一事となん併し斯な事を迂濶々々ど何時までと無く饒舌て居て段々穢でも出ていならねば最う好加減に致まませう時に今宵は何時でムりますか。左様サ最う九時に近い。其話然と内實さんの何所へかお出ですか。左ればサ今一寸と買物を掛て湯屋へ往たのサと云へば彼の何思ひけん額に皺を寄せ苦笑みしつと、エー左様でムりますかと云へる而已

第五 新年實況

鶏三たび號て黎明け旭日暈々として輝き瑞烟濺々として繞る這は是れ新玉の年たちかへる且にて大禮服を着用し人力車を飛して東戸四陌より往き逢ふもの奏仕官以上の方々なり通常禮服羽織袴に高朝を戴くもの官吏は判任官以下にして其他諸會社銀行新聞記者素商人職人等の人々にこそ而して皆な是れ年頭の祝儀を口々に稱へらる、



ぞ愛度けれ簷の國旗も今日をかりの心あるかと思はれてそよ吹く風に飄へるさま千門  
 萬戸の七五三飾も何となふうれしく見えたる又た彼の女子供が今日を顯れど若飾り  
 て男女思ひくくに紙鳶獨樂羽子鞠などに遊び暮す風情の萬國も同じ事ながらまた新  
 玉の年のあしたの景色見えて好ま踰踰踰一步の高く一步の低く所謂千鳥足の程々  
 顔に鼻歌も宜しく出来て彼此より行き違ふものある杯のナト見悪くあれ是又た愛度  
 と云のまし就中我が大坂の簷の國旗に大提灯乃至幕など張詰めたるもありて一層賑は  
 しく見えぬ扱て一日の日も暮れ翌れ二日と云ふ朝の初賣と唱へ時をらぬ頃より騒ぎ  
 立て聲々市街に溢れて最と喧しきハ弊あり又た此日に限り押附同様の無理賣の甚だ感  
 心せず彼の花街の此日をもて殊に大紋日とぞ但し一日より十日蛭子までの間の花も高  
 く別て湯とて謂れ無き散財を乞ふの癖なり其話扱置彼の恵方参り又は初卯に住吉十日  
 蛭子に今宮初天神に天満天神へと参詣する當日の何れも賑やかさ大方ならず流石にも  
 また都會の形状目前に見えて好ければ道路の狭さが土地の瑕瑣にて年々歳々多少の怪

我人あらずと云ふ事なし婆さまが孫を失ひ下婦が奥さんに反見れ丁稚が旦那を探す等  
 キコロく眼で迂路つくさまは何國にも人雜の中には問々ある事ながら別て大坂に多  
 かるど聞くの迂濶なるに依るなるべし爰にまた最と奇しき事のあり何故にや年越の祝  
 ひとて女性の種々に身を獲すと昔しより今に傳へたり頭に霜を戴き額に皺の寄る年浪  
 精々若く買て見ても五十路の坂を下らざる婆さんの顔に白粉を充分と塗り島田番に緋  
 鹿子の切を掛けそれに順じて形衣装十七八の處女の打扮吹き矢の化物も宜しくやすが  
 彼方の辻より顯れ出れば此方の筋より未通女の最と乳臭さが薄化粧の丸鬘頭に扮装格  
 好を七品なお家さんの拵へで遣て来るよと見えし處に又た奥さんが下女に打扮ら家婢  
 が奥さんに打扮つ等さまく異形の風俗にて市中を歩くを他國の人の知らぬ者として  
 吃驚し痛ましきかな此蠻俗々、文物日にあらたまれる今日の我國なる大坂の都會にし  
 て猶ほ且つ此陋習の依然として存するハ杯と口善悪なくも罵るものあれど笑史おれに  
 適當なる答へを得もたされば掲げて以て識者の明解を乞ふにせん



第六 劇場

芝居の事、梨園乃至劇場と云へるの誰も知れど又たこれを春色臺ども云へり是れ之れ何れも唐土の稱されども春色臺の名の因て起る所を尋ねれば蓋し亦た別お故あるかり而して俳優の類りに艶技を演ずるより起れりとなん却説芝居の故事を聞くに頃八人皇五十一代平城天皇の御宇大同三年戊子二月と云ふに南都猿澤の邊ある后土へ何時か大いなる穴の穿り内より故と黒き煙りの立昇りて近國を覆ふ其毒氣に當れる人悉く疫癘に罹らぬは無しし由 天間に達したれば時の博士を禁庭に召させ給ひ此由を鑿みべしとの勅詔ありけるにぞ博士の仰せ畏みて承はりそも穴より出る所の煙りもやすは則ち地中の陰火なり陰火亢ふり逆上する時の万民惱みの理にいへば陽火をもてこれを除かせ給へどぞ奏しける是よりして彼の穴に薪を積入れ焼立ければ遂に煙も止みて諸人の病惱も平癒したりとぞ猶又た此所に於て翁三番叟と舞せて邪氣を拂いせ給ひける其例遂に後世までも傳りて二月七日にの薪能と號し芝の上にて居て此技を執

り行へりと云ふ芝居の名此に始れり又た翁三番叟の今に演劇に殘れるも此緣起に因るとぞ聞えし今の芝居と云ふを狂言作者の作れる脚色の事のみに雖も思ひ居るなれども其前は猿樂・田樂・能・角力・舞・歌舞伎の操等を指して總て芝居を演ずると云へり當時の芝居の俗に謂ふ緣起を祝ふ事に爲したる事なれども後世其風一變して遂に芝居は無竿者の早學問とまで云ふに至れり是れ演劇の名の起る所以あり蓋し芝居の勸善懲惡の場にして一日の中にこれを知り得らるに便ありとそればなり然るにまた何時の頃よりか劇場の婦女子の旣弄物にして偶々以て風俗を紊その甚だしき恐れありと云ふに至れり是れ前にも記すが如く後世俳優の類りに艶技を演ずるに至れるを以てなり蓋し今日の所謂る歌舞伎芝居なり抑もまた歌舞伎狂言の濫觴と云ふの實に慶長十九年に起れり其元の僧衣を着して鉦を叩き佛號に節を附て念佛踊と云ふを爲したるに始まるとなん是れ法花經の提樂品に云ふ勸喜踊躍と解れたる意あるべし其後ち出雲の國の巫女佐渡島お國と云ふが名古屋山三郎と心を戮せ都に上りて多くの舞女を集ひて四條河原に



芝居と興行す是れ則ち我國歌舞妓の濫觴なりと云へり歌舞妓の歌に比田の横田の若苗と謠ふは是れ出雲の里の名なりとぞお國は元巫女なれば神樂を變じて舞ひうたふ妓女この技を爲すに依りて歌の舞の妓の名あり後ち猥褻なる衆動ありたれば女狂言を禁せられ若衆狂言と事變りたるが是もまた同様なる事ありて停止られたるが様々に歎願をしてければ若衆の分り修飾を取て長年の如くに爲し興行すべしとぞ免許ある是に由て若衆は總て額を刺て紫の帽子にてこれを秘せり是れ今云ふ野郎帽子の始めなりと職せて本文に在り斯れを現今の劇場の則ち古昔の芝居と歌舞妓の混じたるものあり星移り物換り劇場も演技の風を一變えて亦た野郎猥褻の技を演ずるに至りていたい婦女子の春を動す媒介とありて一時其弊擧て敷ふべからざるに至りき幕府の時代諸家の所詣る御殿女中と呼ぶもの多くは此俳優の爲に身を誤り或は財貨を奪はる、事どもありし爰に其頃の忘れたるが幕府本丸の中老に江島と云へる不具つ女ありて事に托し屢々外出して劇場に忍び行き當時の俳優にて其名の聞えたる幾島新五郎と密に通じ居たる事

の露見し共に遠島に處せられたりとの醜聞今に残りて人口に膾炙す吁劇場の世の婦女子を誤る一に此に至れり扱て世は御維新となりてより百事改良の途に就き舊を棄て新を競ふ兼て又た虚を嫌ひ實を喜ぶの氣運と成りければ東京にては俳優の如きも夙に亦た此に見るありてや頼に其經年傳へたる狂言の脚色を變じたり寔に劇場は無學者の早學問とぞ世に早くより云ひ傳へける俺們も亦た怎で其こゝろ無く徒らに技を演じて好るべきと彼の市川團十郎の如きは疾く演技の体を更めたるこそいしくも計りつれ左れば其今日に演ずるもの俗眼を打破え紳士貴族の方々をして深くおれを感せしむ斯れば東京の劇場今日は實に昔日と其面目を改めたると霄壤の差も畜のみならず隨つて俳優も皆な此に若目し專ばら其實技を寫さん事にこそ苦心すれ始めて演劇の名に背かざるものあるべし又たこれに順じて俳優の醜行も今の其甚だしきを聞く事なし之に反して我が大坂の如きは依然舊習を去らず俳優も亦たおれを悟らざるもの、如し偶々中村宗十郎の如きものあれども彼れ末廣屋の未だ東京の成田屋の格に至らねば強て他を歌舞



作興するの道を得ざるものに似たるを最と惜けれ去れどもまた時運の然らしむる所に  
 や是を前日に比ぶれば冥々裡に幾分か其面を改めたるものあり今大坂にて角中戎座  
 の三座を大芝居と呼ぶ角の劇場の如き建築新たに其法を改め見るもの其結構の宏麗  
 にして且つ舞臺まのりの都て新規なるに驚き且つ感ずるものあり然れども是はたい表  
 面上の變化のみ顧みて其内幕を見れば俳優其人を得ず演技亦た純然たる大坂の芝居た  
 るに過ぎざるを憾みなれ笑史平生演劇を好む又た好んで其欠点を探すの癖あり彼の葉村  
 屋鶴屋は末廣屋に次で東京に登り久しく彼の地にて興行し何れも立歸れる後の稍や悟  
 れる所あるものに似たれども猶ほ一人で氣を遣るものに異ならず又た其臺詞詠語より  
 身装打扮の眞を寫さんとして成らざるさま恰も靴と隔て、痛痒を覺ゆるの遺憾あり  
 川延若の如き狂言芝居を取りては少しも憾みおければ此優永く戎座の座頭と立られ  
 てより或は旅稼に出るか又は病氣にて出勤をせぬ時の外はすべて此座を命の綱切て  
 ないじと抱り附て居る譯でも無らうが大坂の人氣に協ひ最負ある庇陰にてや其技の爲

おの却て今日の時勢に疎しとの評を免れず併し當時府下での老優なれば其演ずる所も  
 自から見るに足るものあり扱て此三四の老優を除くの外にしては笑史も評すべきもの  
 あるを知らねと去りて此儘に止みなんも本意なければ兎かく愛敬に大略また空口白  
 話を叩くべし夫れ粉飾を去て迫實技を見物巧者に認て貫はんと遊道一本氣に凝る所  
 荒五郎雀右衛門其人あれども惜い事に、兩優とも時勢の變遷の取も直さず廻舞臺の如  
 く樂屋の太鼓の音も場所依りて聞くさへ異なれば幕開の柏子木の音も遠近に依りて  
 矢張り違ひあると云ふ事を知らぬかと疑われ兎かく親譲りの手より外は趣向の取るべ  
 きもの無さに若し此手を封じられもせば狂言はして除れぬと云ふの遺憾あるを最と惜  
 けれ又た舞臺より觀客を白眼み或は首を振立て張紙の虎も三舎を避け乃至又た痔病  
 か癩癩持の如く身振に精々勤むるもの、時好に後れし六日の菖蒲十日の菊のはなはだ  
 迷惑どの見巧者が欠伸も構はねば又た其打扮は大抵本文の定めあるにも拘はらず成る  
 丈け華美に着附模様、それと的込の内緒で詭向き是で、いよも形態に不足のあるまいと



の胸箒決まれば扱て匣を開き粧鏡に向ひ顔手足の嫌ひ無く白粉を充分と塗れを白聖の壁も恥入る許り頼て衣裝萬端附立濟で幕開遅しと待つ其間に早くも樂屋内より西側東側の間櫓敷の素より出。場の面を悉皆と見てフ、ン東側の三ツ目の下櫓敷には島ノ内の藝妓が居るナ其傍に居る髭眼鏡の裾長の旦那筋と見受けらるアノ出孫に居る赤襟の儘か九郎右衛門町のオ、ソノ某店のペーのバアか夫とも白髪の客筋の呉服屋の番唄をしらへ是も餘ッ程ペーのバアだ其話さうと其隣の出に居る年増はまた廿二三と云ふ色白の面差鼻筋の通た眼附口元の従順な美麗婦だがその後に本結城本南部の羽織を着て居るの何も高徒らしいエ、偶々佳人と思へば有主の物よ今日ハ舞臺へ出ても碌な女も居ねば何やら張合抜がした様だ併し西側の何なものか下櫓敷の彼も藝妓其隣も藝妓随分女の來て居るが一番乗て見やうと思ふのハ無さうだオツト左様は云ひさぬ二階樓敷の四ツ目に居るのハ島ノ内の某席のアンだ何時見ても愛敬の翻る、許り藝妓の中でも如彼くらゐな女流ハ無いドレ夫では迂濶に出られぬと身掛ある時幕開の拍子木音高

くカナ／＼と了れば鳥屋の方より吉懸の聲諸ども花道に懸りサア参りませうと三四人乃至四五人ドカ／＼と出て來のは問でも知るさ下等役者ががまて本舞臺にかかりさま一列と並んで正面見物の方に向ひ何や蚊や分らぬ事ども二言三言饒舌立て一方の臆病口より一方の切幕の内へ引込む間も無く徹音の拍子木を合圖にバツリ仮幕の落ると共に太夫座の三弦メンの音調高く續いて迂鳴出すを待遠しと樂屋のうちで前に見て置た櫓敷の藝妓が的込に花道より花々しくも打扮つ花形は是なん誰ぞ笑史種と其人を知らずと雖ども延三郎壽三郎鴈治郎小團治の猿之助正朝慶笑の珊瑚郎。みんし駒之助。三五郎。團之助。殿太郎。瑠璃等の如き何れも將來に望みある花形なり只惜むべし其藝を研ぎ磨と買んよりの筆を暫く婦女子の爲に嫌れざらん事と是れ勤むるものを八百藏。橘三郎。福助。松太郎の如きハ稍々既に老優の流亞を學ぶものおして聊か見るべき所なきにはあらねども亦た其品行修まらずとかや但し伊丹屋の如き方正なるものもありとし云へハ一概にハ悪う云はれまじけん何は兎もわれ大坂の俳優が内外の上に



就て評して見れば此なもの左れば今の見巧者への演技中往々倦厭に堪へずとするもの  
 のあり又た時ありての吐哺の思ひを爲す事あり其上に舞臺の結構不完全にして道具の  
 組立不整頓なるにぞ偶々俳優が技の眞に迫れるものあるも何となく物足らぬ思ひして  
 兎かく満足おし難きさへあるに狂言作意の徹底せしめて彼の結局の如何成たのか此收  
 局が合ぬ様だがと見るもの、解し能はざる事あるぞ亦た憾みなれ併し大坂の人氣とし  
 て演劇を見るもの此等首尾不完全の趣向を咎むるものなくして只其紅粉に身を粧ひ綺  
 羅錦繡に風を飾り飽まで華美に打扮を之れ俳優の所爲となん思ふに外ならざるべし然  
 りわれ當地の演劇關係人が演劇は無學の先學者にして世の風潮に誘われでのどの考へ  
 無さの非なり、エ、モシ旦那貴方の様に左様演劇の欠点許り云すどナト身に染みて黙止  
 て見やはいまし。ナコ身に染みて見よとオ、此幕は道行どか云ふ所か艶技は見て詰  
 らぬもの自分ですれば面白いが左も無ての否だく。ア、また旦那は阿房らしい。何が  
 阿房らしいか斯な演劇の見る奴が阿房らしい。エ、好んし旦那さう面白う無ければ往

ませうか。左様なら往うと打出を待すして連立て出たるは藝妓を携へし客入筋にきて  
 扱て青樓に戻り一杯を催さんとの底意ぞと察する所の其客が此藝妓に惚氣筋まつすく  
 に青樓の門よりドカぐと入るとき火鉢の傍にお家が煙草を燻らせ居る折しも仲居の  
 立出でチャお歸り最う演劇は打出やのりましたかと異口同音に云ふを藝妓は聞て服れ  
 顔マア姉はん斯だす演劇はまだ打出のせね旦那が往うくと云やはりますすもゑ夫で  
 妾の歸て来ましたア、最う詰らなかつたのと翻して云ふ機嫌悪くぞ見えたる程に客人  
 のそを胡魔化さんどてサアく是から一杯飲むべし話の後じやぐと座敷に通れと藝  
 妓は一人り店に居て何やらお家と私語く頼末の知るもの更に無りけり頼てまた右の藝  
 妓も座敷に通り扱て酒肴の支度も整ひ盃の献酬二三回も済みたりと思ふ折から店の  
 方で仲居の聲して小何さん店から一寸と。ア、姉はんのと立て往き暫くして仲居と共に  
 元の座に來り旦那小何さんを貰ひますいと仲居が云へば否とも云れず澁々ながら承知  
 して返す。返る藝妓の心では跡は野となれ山とされと回顧もせで出て往く先きの又た



或る茶肆なり姉のん今晩はと莞爾もので云ふを聞取す小何さんお前今日何處かでお約束でもして居たのかへ那の重やんが先刻から待て居ますとお家が密々聲で云ふは此方の斯くてこそと心のうちで喜びつ、フ、左様かど云た許りで直ぐ二階へ上れば小何さん人を待せるのも程が有る先刻から獨りで退屈したの夫でも和女の面白からうが待つ身の私ハ餘ッ程痛い杯と否味が半分で訝に氣を持せて云へ阿房らしい親方マア妾も今日はと腹の立つ事ハ無い折角親方の演劇を見やうと思ふたにフ、髭無茶が狂うと云ふもえ仕方なく出るとき夫で一寸と親方に使ひと上て此店へ来て貰ひ緩りお詫をしやうと思つてサと云ふを此方の打聞て併し夫の嘘か真か知らねど旦那の前ハそれでは済まぬ。ナニ茶肆の姉のんに好い様に頼んで置たさかい案じる事ハ無いシ夫のさうと旦那の憎たらしい大坂の演劇ハ見られぬとて始めから終まで悪う云やのいしましたせまだ其上腹が立のは親方の悪口から若優の事まで色々悪う云やのいしましたがそれを代言人とやらへ頼んで那の髭無茶を被告取り名譽回復とやら又ハ讒謗とやら云ふので裁判

所へ願ふて遣ての如何です。イヤ、夫の飛でも無い事じや役者と云ふものは元ハ瓦を食とて非人も同様の身のうへにしき着て疊の上の乞食かな」と云われたるが文明開化の世の有り難さに平民と稱れる事になり稼業の藝道に評を入られ是と云はる、も非と云ひる、も皆な其身の爲め又た其外どんな悪口を云つまやつたか知らねど正逆無事ハ云ふてやあるまい好し和女が聞て無らうと思ふても誰にか有たら仕方が無い譯怒いな事を聞き咎めて却て毛を吹き疵を求め草を敲きて蛇に透ひる、様な事をしてハ愛敬を賣る稼業に自分から傷を附ると云ふもの左様な事は私ハアツとも胸に浮まぬ夫のさうと箇様な事が那の旦那とやらに知れたら大變な最ら好い加減にして寐をらとまやう。アイ寐しませうと云ふ此時既に傍ら閨房の設けありて何時しか両情の密話も絶たりしが鴛鴦の襖の内に楚臺の睦言を漏し連理の枝の頭に驪山の花の夢を結ぶ夜もいや更閑けて寂然たれば笑吏うつ、に此状を知る能く聞か猫の水飲む音でなしはて怪しからぬ音を聞くものかなと思はず聲を發するよと覺えし折からモシ那方々々ど耳







俗を去るや扱て甚だ遠からずと云ふ事を徴すべし只望むらくは將來湯屋の東京の如く浴客の風呂外に出て洗ふ事と云猶又別に上湯を設け小桶を多分に備ふべし最も斯く計りつらんには我が大坂の湯屋今日の結構を改築せざるべからず汗の容易の業にあらざれば未だ俄に望み難し併し當業者の早晚此改築に着手あるべき事を今日より念頭に懸て宜るべし寔に大坂の都會にして開化日進の今日に在り唯り湯屋が依然たる舊時の状ありて些も改良の途不就くべき兆なきの抑も亦た遺憾を感ずや杯と啣さすれば蔭か時に直い近所の風呂屋にて浴客の聲して云ふマ、善い論だ

第八 観花實況

古来より大坂の習慣として殊更観花に構むの風あり花は大概何地も同じく梅櫻桃。櫻。蓮。菊などとす又た以上の名所を問へば府下にて梅は天王寺村の梅屋敷櫻は櫻野宮桃は桃山藤の野田蓮は生國魂とてその時に後れず盛りを移さず皆な人の赴きて賑ふと限り無し笑史も曾て人の驥尾に附き梅を梅屋敷に櫻を櫻野宮に桃を桃山に藤を野田に

蓮を生國魂に見たりと然れども騷人墨客の節を曳き瓢を携へ乃至老若男女の打連立ち我れ後れじと往來する雑沓の大方ならぬ程の事なきに驚けり汗の如何にと云へば梅とて見るべきものなけれや櫻も亦た同じ事あり但し一本に櫻野宮の神木とて濃多し彌生の盛りに浪花の騷人こゝに來て幽艶を賞す淀川の渚なれば清かなる花の色水の面にうつる景色塵埃と避て神慮をすらしめ奉るなり云々とわれども過稱なり又た嵐雪の句に

花に風かろく來てふけ酒の泡

と詠るもわれと最と可笑し殊に又た蓮見の趣向の梨明未だ至らざるも早く車を飛えて生國魂境内の田樂茶屋に至り酒を汲みつ、周圍狭小なる池邊に臨み些許なる蓮の花を見んとて大業にも斯く待すの東雲を告る明近きに花の開き出ん状を見んとてなり又た一本に門前の池に夏日蓮の花紅白を交へて咲亂れ池邊に眺む床几に荷葉の匂ひ芳しく池の湯と成て涼しき蓮など、興じ云々とあるの噓事に近し音に噓事に近きのみ



ならず遠見程阿房らしきものあるまじき大坂の喰倒れと云ふ此遠見を見て知るべし只物を食べ酒を掬んとて花を観るの意なり併し桃山の桃の大坂の外にして斯許りの園あるを聞かず又今一ツ觀らるべきものは菜花なり彼の櫻野宮の土堤なる那方に一大噴濺の菜畑ありて行く春の末には充分ある黄色を呈す其景色云ん方も無し殊に土地幽雅にして趣き多く淀川の流れの能く造幣局の壯觀なるを寫し乃至連山遠近に繞亘し樹木鬱蒼たる等一目にして忽ち快豁を覺ふ畫家も筆を絶つかど疑われ四時の詠の亦たある中にも簡程にい杯とうれしく聞えたれども彼の梅花の醜郁櫻花の爛熳たる状の大坂にては見あたのざるぞ惜けれ因に云ふ月を難波若くは番場に見て喜ぶもあれど這も亦た彼の遊見と一般にして經庭かければ別に評せずして可し併し野田の藤は吉野の櫻野田の藤と小歌節にも唄へる事あれバ昔しより紫藤名高くして彌生の花盛にい遠近よりこゝに集ひ寄るもの絶す

難波瀧野田の細江を見渡せし藤浪かゝる花の浮りし

と西園寺中將公廣卿の口吟みありとぞ聞えし又た貞治年中の事かどよ藤浪盛の頃足利義詮將軍が住吉詣のとき此地へ立寄りし折り池の姿を玉川と擬へ和歌を詠み出で

たしへの也かりを今も紫の藤のみかゝる野田の玉かり

と住吉詣の記に載せたりき侏爰に又た大坂を距ると五里餘りにして箕面山の一勝區あり觀花の勝區にいあらねと府下の雅客騷人のわざく鈴を曳き瓢を携る時到来れバ争ふて往くなれば這も觀花の記に次でものせんと中々孟浪の業にいあらざるべし侏も箕面山の豊島郡平尾村に在りても此一山の丹楓多くして秋の末の三千の樹々錦繡の如し拾遺集に躬恒の歌とて載せたるい

水の面に深く浅くもみゆる哉紅葉の色や淵漸なるらん

又た本山の社頭より十八町奥に有名なる箕面瀧と云ふあり巖頭より飛瀧して石面を走り落ると凡そ十六丈と云ふ瀧壺より泡を飛すと宛から珠を散すが如く霧を噴くと雲の如し日光これを燭して璀璨目を奪ふ瀑の上に碧潭ありこれを龍穴と云ふとぞ里俗に云



ふ村民早魃に逢ふとき茲に禱れを忽ち膏雨降るなんと云るの可笑唐の李白の詩に  
 日照香爐生紫烟遙看瀑布掛長川飛流直下三千尺疑是銀河落九天

と吟じたるも今は九期やと思われたり紅葉の候瀧の流れの常に紅を覆ぎ樵夫は亦た錦  
 を着て家に歸り山僧の心を染ぬ紅の色艶しく風のかけたるまがらみの蜀綿を布くが如  
 し立田川の秋の色高雄山の夕日蔭通天橋もこゝに疊みて京師浪花の騷人霜葉を踏で鼓  
 ひ往く長月より時雨する頃の賑ひ楚岸もこゝに在りぞと思はれける抑も此山の役の優  
 婆塞の開基にして白雉年中の創建なり東西の山峯峨々として両部の曼荼羅を表し南北  
 の翠巒峨々どまて不二の尊體を顯す瀧水の長流萬頃の田園を潤す嘗て飛泉の巖石を見  
 るに左右高く峙て龍頭も亦た爾なり南方遼に峙て流れ滔々と繞る其形ち箕の面に似た  
 れバ斯の名ありとかや府下を距る五里餘と云へば左のみ近くもあらねども是を大坂四時  
 の詠の一に供へて宜るべし但し觀花のうち梅。櫻どもに見るべきもの無きを惜むの餘

りその穴の埋草にもと斯くのものしつ

第九 納涼實況

江戸の花見大坂の納涼と云ひ傳へて昔しより名高し但し京師も四條の夕涼とて廣濶の  
 河原一圓に掛茶屋を設け思ひくゝなる納涼の趣向あるの亦た大坂にも譲らず左れども  
 大坂の彼の天満の納涼とて知るも知らぬも昔な云ひ合てその名普く開えて高き亦た  
 京師の比にあらずとかや元來此都會は河水の長流に富み四通八達その市中を巡りて如  
 何なる早魃に逢ふ事あるも河水の涸渴を告る事は無しとぞ宜なり押照の難波の御鞆の  
 濱など云ひて和歌などに詠み水に添ふ景氣は何が扱て此地お若くもの無し殊に天満  
 の祭禮には神輿大河を渡御の式あり舊の六月廿五日なりしが今は七月廿五日となりぬ  
 是を鉾流の神事と云ふ土用入前後の候なれば熱威幾んど強く怡も炎蒸瓶中に在るの思  
 ひしつ日中を往きつれて皆な天神に參詣し夫より此大河の兩岸に休らひ半点の風も無  
 き暑さを忍び待構へたる賑さは京師の祇園會浪花の天満祭より外にありとも聞えず扱



又た昔しは今の難波橋の邊りを銚流崎と云へりしが當時の祭日に銚を流し其どいま  
 れる所を指て御旅所と定めたりとなん口牌に傳へたれども今の無し爰に納涼の實況を  
 記すに先だち概略天満祭の景況を説くべし抑も天神祭は大坂第一の祭例にして初め天  
 満の本社より神輿の渡御ありて難波橋に至り夫より船にて松嶋の御旅所へ神幸す御迎  
 船として福嶋より例に依り船を漕ぎつれ來り寺嶋夷嶋前垂嶋勘助嶋東西江子嶋等  
 よりいろくの本居士と飾りて船中に鳴物を囃し踊りて興すこれを見んとて看物は皆  
 な何れも河中所せくまで美々しく賑して酒を勧め三弦に興じて夜の更る事知らずそ  
 の以前の大川筋兩側の諸侯第に家々の紋附たる挑灯を照し流光には浮標を立て船の  
 往來を自在にす北の新地觀川の青樓より風流の衣裳を粧ひて女も男に變じ童も姥と優  
 し名を得たる妓婦も揃ひつれて前噺後噺に妙曲を奏づる狀ありたる由本文に見え  
 たれども今は知らず扱て神輿の還幸の祭禮の當日即ち廿五日の夜の事にして船路遙に  
 松嶋より練下りて東雲を告げ渡る頃漸くにして天満の本社へ還御なる折節はまた難

波橋天満橋の川上川下所せく船と裝ひて漕ぎ出す見物の人群を爲し橋上橋下どもに立  
 錐の餘地を見ぞ何地も斯る折の同じ事ながら此都會の人惡くてにや船の價平常より數  
 倍の昇騰を唱ふ去りとて難波人の勇みに勇みたるの今日の事あれば痛しども思はず氣  
 味能く散財す花街の藝妓乃至娼妓のまた今日を常より約しそれく鼻下長を押へて負  
 ふで往くを顯れとすア、鼻下長が懐る晝夜の花代ども併せての中々の散財あり併し大  
 河の長流に臨み烟花の音三絃の聲湧くが如く紅白の提灯萬燈の光りと添へて水の面照  
 る月の影よりもさやかなるさま云ふばかりきさの晝夜を棄て將た何時かはある又た諸  
 商人が手に落る金錢も實に少小ならずと云ふ不景氣々々々の近年の口癖と云ひあが  
 ら年々歳々の天神祭納涼遊は今も昔も差して變らず寔に盛んなりと云ふべし但し平生  
 の近年殊の外に淋しく烟花の音三絃の聲さへ稀に聞くのみ大河の長流清涼を呼ぶ水の  
 面却て寒ければ彼の納涼船を的の物賣船も大方の欠伸で夜を更し風ある夜などは感胃  
 に侵され骨折損の章臥儲より最一層と詰らぬ杯どの苦情あり斯て天満の納涼も遂に



其名の空しきに至らんか杯と或る好遊家が歎じての話あり知らず其説當るや否や

第十 天長節

夫れ恐れ多くも天長節の 今上天皇の御誕辰を祝し奉るの御大祭日なり當日の則ち十一月三日にして年々御祝式を行ひせ給ふ上の皇室より下の庶人に至るまで皆な萬歳を稱ひ鼓腹撃壤太平を謡歌すべきなり幸にして我が大坂にての能くこれを履し何事を棄置ても天長節の御當日の勞を休め祝意を表し奉るべき筈を布き宴を張り一日を消すと御維新以來の新風俗とはありき善哉行事と云ふべし然れども若し是れ土地の風俗として物になぞらひ事に托け以て酒を飲み遊ばんの意より出たりとすれば如何ぞや果して然らば其心これを責めされを咎めざるべからず笑史熱々土俗の人情を洞察するに於て傲慢自負の色あるの既に前章おも述べし如くにして且つ其利得にあらざるより内容に顧みざるの風あれば或の事の其道理よりすべきものなりと雖ども多くはこれを措て問はざるなり猶ほこれを再言すれば搖錢樹ありと見るや之を鑿々聚寶盤端ぬと見る

や忽ち疎となる最も薄情の態なるにぞ天長節の御祝は只管酒を呑み遊ん事の爲めならずや杯と口善悪なくも罵るものあり左れば蕪妓を南に尋ね北に訪ふもの又の新町乃至堀江の雲となり雨となり若くは松嶋の夜露に濡れ新堀の朝霧に迷ふ輩ら何と心すべし又た遊所が此日を大紋日として平日の線香に幾倍を増し己が利得を計るは何事と餘の知らず天長節の御當日の平生より線香を安くしてまを御祝意を表し奉る意にも適ふなれ免かく其心得なくては相濟ざるべし。モシく先生あなた先刻から色く人の欠点許り云ふてはおますが最う好加減にしなさらぬと遂にのれ自分の體も出ますせ。ナニ笑史の體が出るとナ何時天長節の御祭日に體を出した。ハ、ア是の面白い彼事をお忘れなすたら茲でまた熊谷が陣屋物語の二の舞と出掛けませうか。エ、喧ましい古語も往時の答ひべからずと云ふ事があるの此愚かものめが

第十一 角紙

勤進相撲の興行は常に東京大坂の二府に在り而して京都の之も次ぐものなり猶ほ其他



の地方にても相撲の興行なる節に東京大坂乃至京都の力士を招くべし三府は大抵四時とも此興行を欠ぬものに似たれども春相撲秋相撲乃至寒相撲を最とすれを若物も此時の別して入り多し初て今大坂の力士を問へば熊ヶ嶽の九紋龍を始めとして段々之れ有る事の皆な人の知る所なれどもこれを約言すれば今の大坂の力士の或は東京の力士の一步を譲らざる可らざるもの、如し近來東京大坂京都の相撲は互に其力と拵する事われども其勝を占むるもの多くの東京に在り偶々熊ヶ嶽の雷電(東京)に勝て其名芳しと雖ども九紋龍の鶴ヶ濱(東京)に負けたるの憾みなきにあらざ然れども勝負の時運ありとの格言もあり殊に土俵の上の事なれば所謂る機化にて負を取るの止むべからざる事もあれども古來より力士の其冠たるもの大坂に在りたるを聞ず只或る時は有名なる力士と取組み僅に土俵の上にての勝を得たる事ありたる由は聞けども未だ以てこれを稱道すべからざるものあり何ぞや彼の相撲に「待々」の風ある是なり而して是れ素と大坂に始れりと云へり卑怯も亦た甚だしと云ふべし夫れ角力の古法は双方相對し左右の手

を下て己れの向ふ臍を挿へて居れば行司團扇を双方の仲間には挿み暫く双方の呼吸合を審察し双方呼吸の揃ふたりと視て「スマッ」と云ひさま團扇を引けば双方とも「ヤッ」と云て立舉り勝負を決する事なり近頃此風去て「待々々々」と云て行司が團扇を引くとも其差圖を奉せざる事となりなれり享保元文の年則とかや讃岐の谷風と云ふ角力大坂にて關と取り九年の間勝通したり翌十年目の角力に勝れば日下開山の關取に成るべき沙汰ありし其頃大坂の仲衆に八角と云ふ角力夫あり臂力頗ぶる強かりまを當時府下の或る豪商が愛し最負にしたり谷風と取組み今度の角力に勝たらば充分に手當して一生を安樂に暮らすべし如何にぞやと屬しければ八角を聞いて思ふやう斯る寔加に叶ふべくは望みても復た無き事ながら迎も谷風に勝れば工風なし如何のせんと言ふ餘り卑怯にも「待々」の一策を案じ出たり斯て谷風八角取組の其日八角の谷風を堅くせんと思ひ附き行司の團扇を引くと均しく谷風仕懸れども八角は「待々」と云て取組ず斯くすると數度に及びたれば谷風も是迄に無き事もある心焦燥て逆せ切たるを八角はそれを見て先を



取り仕懸け道奴が慣手の「モヤン」を取て押出し勝を占めたりとなん是よりの後の雖も負じとて皆な此の「待々」を學び竟に今日の如く「待々々々」と云ふに至れり爰に「待々」に就て最と可笑き話あり東京にて近世有名なる角力漢鬼面山と兩國との取組に兩國が「待々」を云ふと六十餘度鬼面山が三十餘度に及びたる事ありとかや幸ひ大坂の取組には未だ斯許の奇談あるを聞すと雖もそも「待々」の根元は此大坂に在ると前に記すが如し猶ほ今も兎かく卑怯き舉動の見えて時々看客の見るに堪すなどする事あり斯ての力士たるの格を素すものに近し今の相撲の技は單に藝人の一部に在るものに過ぎざれども這は他の遊技との事變り力を角へ術を闘すの武事なれば餘り卑劣の舉動あるの見宜るまじ因て今爰に笨史相撲の沿革を略記して彼の輩に悟す所あらんと欲す開道聖武天皇の御宇神龜年中と云ふに近江の國志賀清林と云へる人あり禁中に召されて相撲の行事に定められ相撲節會を行はれし事ありけり其後これを行はれずなりて志賀の家斷絶したるが後鳥羽天皇の御宇文治年中再び相撲節會を行はせらるる時に行司を勤むべき

者奇かりし處に越前の國なる吉田豐後守家次と云ふもの志賀家の故實を傳へたる由聞召されて五位に叙せられ追風の名を賜はり獅子王の御團扇を下されて節會の式を行はれたりとかや然るに承久の兵乱起りてより節會も亦た久しく中絶せり正親町院天皇の御宇永祿年中又た再び相撲節會を行はれし時に十三代の吉田追風故例に依りて行司を勤めたり元龜年中二條關白より日本相撲の作法二流なきの意にて一味清風の團扇並に鳥帽子狩衣等を賜ひ信長・秀吉・家康諸公の時には相撲を司せり十五代追風の時に至り相撲節會禁中にて復た行はせられずなりしかば其式を二條家に預けて細川氏の家臣となりけれども代々相撲の故實を其家に相傳し諸國の力士等が免許も此家より出したり云々と寛政元年十一月吉田長左衛門の書上に見えたり扱又た相撲の事ハ垂仁天皇紀に野見宿禰出雲より至り當麻蹶速と力と揃す二人相對立して各々足を拵て驟る驟て當麻蹶速の脇骨を折り亦た踏で其腰を折てこれを殺すとあり皇極天皇紀に元年七月乙亥白濟の使人大佐平智積等を襲すと云々相撲を命せられし由見えたり是より禁中にて



年々七月に相撲節會を行はせらる、事どのなりぬるとか又た江家次第内裡式雲圖抄の諸書にも相撲節會の事を記し年中行事歌合相撲(七月廿八日)かた分てことり使のいそしきい今日の技手の爲と成けりどありて其判に相撲とやす事ハ諸國の供御人を召集めて七月に相撲節會など云ふ事を行て天子の御覽するなり初を召合せとやす後にすぐりて又た御覽するを扱手とやす事ありことり使とやす事ハ萬葉集に相撲使と書てことり使と讀ひと承り及び侍る是は諸國の相撲を召す使の事にこそとあり諸國の供御人とハ近衛兵衛白丁の壯士なるべし當時相撲の名に相撲司。相撲長。最手。占手。助手。立合等の名稱あり相撲長ハ今の頭取にて最手。占手。助手は今の大關。關脇。小結の三役なり立合ハ今の行事の事ならんと云ふ又た最手。占手たる者には左右共に免田を賜へりとちん是に依て觀れば當時ハ今の如く相撲を營業にするものは無りしと見えたり足利の末頃より勸進相撲と云ふと漸く世に行はれたりと云へり曾我物語相撲の條を見るに當時ハ相撲ハ大抵一番勝負にて勝ハ何番にても相手の出るものと見えたり左ハ相澤

彌五郎は五番勝ち八木下小六郎ハ六番。竹下孫六ハ九番又た股野五郎ハ廿一番勝て遂に河津に負けたるが斯く取細きて負けされハ退ぬ風なるにぞ相手の無さに至りて其日の相撲と名を揚げたりとかや且又た昔の勸進相撲ハ勸進本の手取許りの取組に限らず寄手に望みあれハ取手をして取合しめたりと聞けり左ハ勸進相撲を呼で寄相撲とも云へり然るに屢々喧嘩を招く事ありければ遂に此寄手の相撲を禁せらる是よりの後ハ力士と稱する相撲取のみ東西に別れて取組む事となり且つ勝負も此時より今の如くに一番組合となれり最も此作法行ハれてより既に二百餘年の久しきに至れりとちん相撲の沿革はそれ此の如し左ハ今日の相撲の如く卑劣千萬の舉動なく而して力士其名に背かざらん事を勤むるあらハ更に看客をして猶ハ一層其感を増さしむるに至らん歟

第十二 三百奴

我が大坂は商業の地なれを古來其道に缺くもの一もこれ無志而して土地の繁昌は則ち商業の盛んなるに由らざるハ無し併志一利あれハ一害随て生ず爰に其商業のうち唯



り恐るべく惜むべきものあり三百奴是なり斯く言ひ人取は疑ふて三百奴と云ふものは商業のうちに在らずと云ふなるべけれど決して然らず是を聞く嘗て大坂に拘捕の多きを憂へ時の町奉行かよ如伺にもして拘捕の跡を絶やとて白方計書迄遂に拘捕を一の商業と爲す而してこれに亦く染抜たる手拭を渡し拘捕を爲さん時の必らず此手拭もて煩覆りせよと命じたり次で市中へは赤染の手拭もて煩覆りするもの市中を徘徊すれば是れ拘捕の商人と知り注意すべしと觸示したれば是よりの後ら市人の皆な赤染手拭の煩覆りする者と見れば早くも銘々用心を爲したるにぞ拘捕のこれが爲め大いに商業が隙に成り自然と其數を減じたりとかや道は古き昔語にして戯言に近けれども斯りける程なれば今も我が大坂は殊に拘捕の多きを覺ふ蓋し亦た拘捕は大坂の名物と云て可なり近時また強盜竊盜の惡漢最と其數を増し府下何れの地となく連晝夜にして此殃禍に罹るもの一にして足らずと雖ども是等の惡漢は皆な人をして其罪跡を知らしむるものなれば惜むべきの則ち惜むべしと雖ども亦た恕すべき所なきにあらざる唯り

三百奴の然らず表に徳義を唱へ裏に惡法を蓄くものにして因て以て生活するを職業とす左れば笑史のこれを彼の拘捕若くは強盜竊盜に比べて遙に其右に出るの曲澆ありと云はざるを得ず請ふ試に是等の徒の所爲を見よ出ての法廷に作爲の辨を奮ひ退ての訴訟の奸策に心を勞し又の冑家を教唆して古證文と買出志負債者に催促志乃至商家の金満家手合が法律を知らぬに騙りて漢語交りの法螺を吹き誠實を偽飾して陰計を策す殊に其甚だしきに至りては親族間にまで立入り或の葛藤を解き乃至家治改革に預るを名とてて双方を説くに強談無理往生を以てし其止を得ざるに承諾するを成功と名けこれが禮金として遂に巨額の金圓を貪取るとかや若くは又た其禮金にして思たより掛なかりし時のこれに報ゆるお乱暴狼籍を以てと幸に本年太政官第一號の布達に依り此の如きの徒が出て訟廷に代人とあるの弊の能くこれを防ぐ事を得たりと雖ども因て以て是等の惡徒が全く其跡を絶つに至る事を得ざるの遺憾なり」コレノ何が遺憾とす抽者が度々参つて掛合通り彼方にての僅に千圓を要求する者にておれを即坐に渡せば直



地に示談と遠ると云ひ居るのじや底で拙者が此仲裁に立入た事も拙者の顔に免じて最う五百圓を出そが好るべまど箇様に道理を盡し穩當なる掛合を爲すにまだ分らぬと申すか手前の様な理不盡なる者にソレ斯う云ふ物が宜らう呷の文句でい無ければ長い刀の修華に持て参らぬ卒と申すはソレ此通り閃々光るは銀紙を張た芝居で見るとは大層な違ひじやぞサア如何だまた道理が分らぬかどの強談に此方は打驚きブル／＼震へながら寔に貴郎の仰る事の平極は無理は尤もゆる最う五百圓の差上たたく存ずれど手前方も是まで度々仲裁のお方とて参られソレ百圓ヤソレ二百圓と剝取る様に持て往れた金庫も勘なくムらぬに又も貴郎のは足勞に成りますとは何たる事か一向に譯が分りませぬ。コレコレ又しても返らぬ縁言を申す左様の事はアツと思切りに更には茲へ千五百圓を出せば最う何も言草の無いのじや又た是まで取れたと云ふ金の事の毫も拙者の關係の無いと况て手前が兎相で出した事ソレ底が世間で云ふ三百代言を頼むから此な間違が出来るとのじや最初より拙者が關係すれば決して右様の損耗の無く且つ決着の

示談も疾に濟で仕舞ふ等と思へば拙者もお手前への氣の毒な事と内々存じて居る併し夫はそれ早く千五百圓を出して示談を整へるが宜るべし扱て其千五百圓と云ふ金額も拙者一人にて丸で禮に貰ふとでは無く先づお手前より五百圓先方より五百圓都合千圓を拙者が申受る譯されば其所に少しも無理の無らうソレ此位な道理と世間の風に吹れた者なら直に分る併し得心の往ぬのでは拙者も迷惑なれば又た晩程に参るべま夫迄の間は篤と思案を巡らし往生して奇麗に千五百圓を出すが好いそれが却てお手前の利益なり必らず共に無分別な考へを起すまヒドリヤ何れ後刻にと云ひ残して立去れば家内の誰彼互ひに顔を見合しつホット一息つゞくと考へれば考へるほど斯く馬鹿々々しい事の無ければ何でも千五百圓の金は渡さずと置れまいか彼此するうち復た来るだらう杯と頻りに思案最中はや入相の鐘の音耳元近く鳴り響くに此方のいとゞ驚きおたりトは是れ如何なる顛末なるぞ是ぞん三百奴を商業にする曲漢が取引双方の掛引にこそあんなれ



第十三 寄席

我が大坂に寄席の設けありてより以來未だ百年に至らずと云へり然れども有樂の都會の地なるにぞ人烟稠密の所大抵これ無きは莫し但し寄席に數種あり講釋師。落語家。淨瑠璃。仁和賀等とす切て其席の重なるものを問へと法善寺。九軒。堀江。淡路町。平野町。御靈社内。天満。松屋町。等なり其他故學に追われぬと人氣の相傳るところ隨て出物も亦た好しと云ふべし而して其出物のうち殊に感すべきもの義太夫にして次の地唄なり長唄。清元。新内。二上。新内の端唄。都々一。大津會等の如きの聞くに堪ず想ふに此地の人の是等を唄ふべき音調を持ざるべき歟只僅に其忍んで聞くを得べきものは先づ長唄なるべし清元。新内。二上新内の端唄。都々一の如きの筈に東京の輸入物にして好んで能くこれを唄ふもの尠ならずと雖ども僅に土地なる素人の耳を掩ふに過ぎざるのみ新内に二種あり一は富士松一の鶴賀にして大坂にて専ら流行するもの鶴賀新内なり東京にては富士松を上品と云ひ鶴賀を下品と云ふ往來を流す俗にナンブアイダ

イの則ち鶴賀新内の流れを汲むものに去て我が大坂の人好んでこれを語り好んでこれを聞くもの多しと雖ども共に未だ其妙を悟らず蓋し是れ悟らざるにはあらざるべしと雖ども如何にも其音調其妙に入るを能はざるべし清元の如きの専ら飽なるものあれば俗に云ふ粹にまで意氣にあらざれば聞れず二上新内。端唄。都々一も亦た然り東京の諺に端唄は苦界に沈める娼妓の戀を慰め都々一は娼妓を殺すものなりと云へり大坂の娼妓の金の爲に其身を汚し東京の娼妓は粹の爲に其情を動す故に都々一と東京の専有物にして且つ其音調東京にあらざれば粹にして意氣なるを能はず然るに大坂の寄席社會廟社會に在りても猶ほ其粹にして意氣ならん事と學んど欲し頻り都々一を唄ふと雖ども所謂る下手の横好たるを免れず又た彼の大津會の元の東京の輸入物なれども今い彼の地にての廢物にて唯り大坂の寄席社會に専ら流行す一体大津會など云ふ唄は太平無事の世の一時の流行唄たるに過ぎずして唄ふて愉快聞て面白く杯と云ふ程のものにあらず左れば東京にて今の廢れて唄ふもの稀なるに至りしなり案下再説爰も又



た笑史は序を以て都々一の根源を説くべし是も大坂の人手ながら好どの因みあれば  
 斯くなんあるも強ち無益の業にもあらざらん抑も初め都々一の號の起れるは江戸の昔  
 し落語家の仲間にて扇歌と云ふあり三絃を能くすトツナリトンの元祖翁にして或る時  
 始めて都々一を唄ひたれば意外に江戸の人氣に叶ひ爾來大いに流行して遂に全都の感  
 する所となり今日にては東京の藝妓がお坐敷に出れば先づ祝義を附け次に三下で坐敷  
 をさんざめかし次に都々一で心意氣を明す此順序の如何なる藝妓にても必らず紊すと  
 無し但し大坂の藝妓には是等の勤めを爲す事を知らず却て説く俎此都々一の因て起れ  
 る本を尋ねれば遠く元祿年間の頃る盛んに行れし投節に濫觴りこれに滑節を加味して  
 其頃よりこれを唄ふ者ありとかや左れば都々一の始めの既に百有餘年の流行なれども  
 當時未だ都々一の號のこれあらざりしと云ふ最も投節と云ふは往昔足利時代にも行は  
 れしと見えたり當時道遙院實隆卿の歌に

思ふ事なけふし聲に唄ふあり目出たや松の下に群居て

と云ふありて又た和歌名高かりし鳥丸廣光卿も好みて投節を唄ひ玉ひまどか最も  
 都々一の濫觴と云ふべき投節の箕水と云へる人其文章と作り堺の隆達と云ふが聲よく  
 して之を唄ひしとか聞く中にて殊に世に聞えしもの

松の葉こしの磯邊の月は千とせ経るとも替るまい

思ひ乱れて若屋の里にあまの焚く火か飛ぶはたる

又た滑節にて聞えたるは

君が来ぬとて枕な投げそなげそ枕らにとがもなや

此ぬめりと云ふ事昔し芝居にて傾城の出端などに唄ひたる事あり又た投節は以前江  
 戸の本所に住むたる笹丸の隠居と云ふが能く唄へりとして名高し又た新内も其原は都々  
 一中に出で彼の宮古路豊後塚の門人加賀太夫後に鶴賀若狭と云ふに濫觴り新内は鶴  
 賀の二代目なりと云ふと雖ども實に富士松蔭屋が門人故ありて鶴賀を名乗る事といな  
 りたれば鶴賀と富士松との節の則ち其別ある事なり閑話休題是より落語家に就て評



を下さんに落語家の此地に寄席の設けありてより以來始めて出来たるものにして其最も旨とする所の滑稽と猥褻となり近來猥褻の違警罪に問はるゝの恐れあれを稍や其醜を減じたるに似たりと雖も元來猥褻は落語家の所謂落語原質とも云ふべきものなればこれを嚴禁する時の殆んど其業を爲す能はざるもの、如し殊に大坂の猥褻を喜ぶの風あれば蓋しこれを絶つと一時に落語家の寄席に往くもの亦た其跡を斷つべし扱又た落語家の滑稽は言語に加ふるに動作を以てす人烟叢裡素裸に成り諧謔頤を解き醜体眼を汚すの舉動あるの田舎の暫くこれを措き大都會の大坂に感ずべからず最も是れ人氣の向く所にして隨て落語家も亦た寧ろ真味の譚より座の一場の笑柄と良とするに在りとする歟成程古昔は一分線香即席話とて瞬時の間に一落語を畢りたりと云へり蓋し是れ落語家の本體に適ふものならんか扱又た落語家も其起原は遠く中葉以前に在りて京師に濫觴り即ち某大納言の禁中にもせられ玉ひしが杯と云ひ離すものあれを確たる其證を見ざれば信じ難し家下再説當地の人氣の前にも云ふ如く免かく單純の

落語のみを好み所謂人情話の耳に入らぬにぞ偶々得意にこれを饒舌立る落語家ありと云ふとも聽衆の少なきの遺憾なるべし又た落語家の講座には常に卓子を兼ねたる膝隠を置く而して時到来れば樂屋で音曲鳴物の囀あり其間落語家出て座に就く先づ左右燭臺の燭花を切り咳一咳涕を拭み又た湯を飲み了れば頓て張扇もて卓子を叩く此音を相圖に樂屋の鳴物を止む止むと同時にエー扱と話し掛るが大抵此地の落語家の例なり斯ていよゝゝ落語に取掛れば左手も拍子木右手も張扇をもて懸合に叩く其喧しき聲子も爲に驚く許り亦た一種と云ふべし而して鳴物音曲は常に落語家と相待て離れず一落語を畢れば一離あり落語家交代する時も亦た同じ賑やかと云んより寧ろ騒々しと云ふべし扱又た講釋師の免かく姑息の風あれば彼の軍談の如き講釋師の本體なれども靴を隔て聲を覺えるの憾あり端物の如きは丸で聽れず又た輕口なるものあり二人相對して懸合話を爲すものなり是の多く落語家に交りて出席す只諧謔を之れ旨とするのみ或は談話たるの誹謗を免れず當地の寄席の大抵斯きものなり此他操人形淨瑠璃の流行



す其席にして名を得たるもの松島の文樂座と次に博勞町の稻荷社内島ノ内の澤ノ席等なり近日文樂座の如何してにや世評を落去稻荷の淨瑠璃唯り喝采あるに似たり操人形の如きの當地を以て最とすべし而して淨瑠璃の如きは既に前に云ふが如く當時大坂に若くもの無ければ殊に實ありて面白し但し今序に又た操人形の起原を説んにそも操人形のこれを芝居と呼び齊席との全く別異のものとするれども笑史のこれを齊席の部として芝居との全く別異のものとする蓋し今日の梨園は漸く其脚色を一變して實影を寫さんとするものされば操人形芝居とは同日にして語るべからず是れ笑史が此篇を起すの旨趣にして則ち穴探の本旨に適ふものとす閑話休題そも淨瑠璃操の元織田信長公の侍女にてありし小野小通と云へるが容貌美麗にして殊に秀才の聞えあり信長公生害の後ら秀吉公の籠中に仕へたるが其昔し紫式部石山に於て源氏物語を作られし例に倣ひ三河の國矢矧なる淨瑠璃娘が由縁を十二段の物語に作り扱ひ三河の國矢矧の長者と云ふもの一子なき事を憂へ同國碧海郡峯の樂師に立願して一人の娘

を擧ぐ樂師瑠璃光の授け玉へる子なれを淨瑠璃御前と名く時に左馬頭義朝の末子義經の鞍馬山に在りしが父義朝の仇平家を滅し源家一統の御代になさばやと頃承安二年二月二日の未明に山を密に立出で三條の長者金賣吉次を語らひ奥州伊達の秀衡を頼みとして彼の地に下向あるとき矢矧の長者が許に宿りを求め其夜彼の淨瑠璃御前に忍びて契れりなんと聞えしは昔な人の知れる所なるが抑も亦た淨瑠璃の號に此に濃筋れり斯て小通が此物語を作り彼の平家物語の信濃の前司行長入道が作にして生佛と云ふ法師にこれを教へて節を附け琵琶に合せて語らせける例に依りて岩船檢校と云ふ琵琶法師に音曲の名人ありて此物語に節を附けたり又た角澤瀧野の両檢校三味線に合せて曲節を語り虞めり天正年中薩摩治郎右衛門と云へるもの而檢校に節を習ひて攝州西ノ宮の傀儡師を語らひ人形に合せて十二段に語る是れ操芝居の濫觴なり又た永録の頃六字南無右衛門と云ふ女太夫京都四條川原に於て淨瑠璃操を興行す此評判國々々でも聞え高く遂に高家に召出され 叙覽ありしより淨瑠璃太夫受領勅免ありしなり是より三が



津に淨瑠璃大夫分じて種々様々の流儀を顯のせり扱又た傀儡師の濫觴を解んに抑も蛭子の神とすすの伊弉諾伊弉册の二柱の御神はじめて遊合して夫婦となり一に大日靈尊を生せ給ひ次に月讀尊次に蛭子を生せ給ひけるが蛭子既ふ三旗に成り玉ひぬれども脚立す殊に容貌悪しけれバとて天盤榊樟舟に乗せ順風に任せ放ち棄て給ひけるが遂に西の宮の浦に着き爰に鎮座せらる後代に至りて道齋と云ひる人御神のほご、ろを慰めけるに是より波風静かにして獵船多くの魚を得るを久し時に道齋去ばらく痛みて身退りけれバまた風起り波高うして猶さら獵も無りしかバ百太夫と云ふもの人形を作りて神のほ前ある箱の傍らに身を潜め人形もて我の道齋なり尊のほ樹鎌を窺はん爲め参りたりとてほ心を慰めける是よりまた波静りて獵も有りけるとさき爾后時の帝そを聞召させ給ひ禁庭の政事に出勤すべきの由 勅諛ありければ百太夫都に登りて此儀を勤む是に依て「大日本者神國故以慰神慮者爲諸伎藝首此の如きの官を下され諸國諸社神のさめの事 勅免ありしより胸に箱を掛け人形をもて神を諫めしなり是れ傀儡

師の濫觴とぞ百太夫の諸國を巡りて淡州三原郡に着き三條村にて身退りけり是よりの後ち諸國に操人形の技始まり殊に其技に名の高き上村日向掾なり往來對刀御免にして芝居の表口に大日本諸藝首と云ふ額を懸けたりとなん歌道にの遊女をさして傀儡と云へり是を思ふに往古の遊女と客人の席に至りて歌と唄ひ舞を能くし人形を遣ひ杯したりと云ふ故に傀儡の名を呼ぶものなるべし又た唐土にて傀儡棚と云ふは日本に云ふ糸操なり依て此事を南京操と云へる由一本に見えたりオット是ハ穴探では無く跡探に成て來た阿々

第十四

濫材

破落戸は一お遊人とも云ふ往昔戦國の世の興廢存亡常無きに當り或は其主を失ひ又ハ其産を亡したる所謂る武門武士の零落が其身を處するに道なくして遂に民間に潜み或ハ敵にこれを知られん事を恐れ或ハ時の到れるを待て空しく歲月を送り其自から世を狭み踪を隠し天高けれども踏み地厚けれども跡して彼所の浦曲此所の島嶼に流れ渡



り爲すべき事の無き儘に何時しか一人二三人語らひ合て賭博を徒然の餘り爲したるが  
 始めにて遂に類の友を呼ぶの譬に漏す彼方此方の落武者は固より甲斐なき無宿者まで  
 が集ひ来て迭みに語りつ語られつ遂に其黨を結ぶに至りしが中に豪家に押借強談漸  
 く其勢を助長すと雖も時の政府の未だ其政略上これを鎮撫するの策を施すに遑わら  
 ざりし況んや群雄割據互に釁隙を窺ひ以てこれに乗せばやと待構へたるの時なるに於  
 てをや徳川氏天下の政權を掌握り武威海内に輝き天地の間これに敵對するもの無きに  
 至りての怨みある者の隠れ逐る、者の逃げ遂に亦た遊人の黨與を増す事となりしと  
 なん扱て漸く此弊の普く諸國に波及するに至りたればこれが巢窟を妨んと議るものわ  
 りたれども撥乱反正の際徒らに兵器を勞し天下亦た再び乱階を開かんと如何はあらん  
 と政策上これを見合せたる事ありとかや其後は等の徒が任侠を以て世に立つものある  
 に至り次で東都に幡隨院長兵衛又大坂に朝比奈常兵衛など云へる濱村の頭分な  
 るが顯れ出で乾兒の二三百乃至四五百人もありて良民を苦めたると掛なからず時勢漸

く其弊を矯めざるべからざるの運に向ひたれば時の政府其法を嚴にして是等の徒が  
 賭博を以て遊べるを見れば忽ち捕へて獄に下し相當の刑に處せらる、事とはありしにぞ  
 爾來大いに破落戸の數を減じ兼て又た俠客をもて任する者も遂に其跡を隠すに至りし  
 が降て寛政享和文化文政天保の年間に政令弛み官司怠りたれば復た死灰再燃の勢を  
 顯したり但し此時の常總及び上州邊界ばらにして彼の上州の長脇差及至越後無宿信  
 州無宿杯と聞えての何れも無賴漢の遊人にて賭博を盾に強談押借これを彼の強盜窃盜  
 に比ぶるに實に其間髪を容れず然れども此輩の皆な多少の俠任あれば彼の弱きを扶  
 け強きを折くの風ありて善にまれ惡にまれ頼るれば一命をも棄て顧みずとす扱て世も  
 物換り星移りて御維新後の殊に賭博を嚴禁せられ其懲戒も舊時に比すれば更に一層の  
 嚴を加ふるに至れり否是れ我々文明の一進歩と謂ふべし然れども其餘弊免かく去り難  
 くて近時猶ほ陰然其黨を結ぶもの無きにあらず而して良家の往々にしてこれが爲に苦  
 めらるとなん又た我が大坂の地殊にこれ有ると掛なからず而して是等の曲漢が常に掛



伺する所の事ばら南地に在りて陰に賭博を稼業にするなれども往時の如く其業を盛んにするに能はざれば遂に死決隊の群出て聞れ無き喧嘩を仕掛け其一方は傍らより仲裁と號して入り禮を貰ふを名として其實強談し或の俳優藝妓の家に至りて何分かを痛ふり或の理不盡ある頼みを受けて真家に暴れ込み手に業に了ぬ業して其家に迷惑と掛る等種々様々なり然れども是等の輩の遊人の中にては殊に無知の極と云ひるものにして決して名あるもの、所爲にあらざるとなん聞けども警察官も是等の輩の爲に屢々處裡に苦まる、事ありとかや蓋し是れ親方株の輩が陽に恭順を示し陰に其乾兒を教唆し飽まで横道に出しむるに依るなるべし杯と笑史が聞くまゝに相替らず於道化半分慰み半分で辻褄も合ぬ戯事を書て居る所へガラリと戸を開て這入り来る者あり先生また相替らず穴探でふりますかテ而て今書て居るの何でふりますか悪口を叩く事や穴を探す事なら私も商業ふのせぬが先生に負ひ積り何ならナトお手傳へ致しませうか杯と豊稔とに生れたかして口に年貢を持ぬにや延續けに饒舌立てり笑史いかに

も今日のお手傳へを願ひたい實の獨りで斯な事を書て居たら如何な目に逢ふかも知れぬと内々心細く思て居た所也至極妙だ。イヤ先生に夫程肩を入れて云られると私の最う嬉しくてくく溜りませぬ是は先生限のお話したが一日の中には是非一遍の何處かへ往て減す口を叩いて見ぬと氣分が悪く其日は一日食事も碌に喰べられませぬが私の癖はも一ツの病であらうと自分では觀念して居ります其話左様とそろくお手傳に掛りませうか。オー何分お頼みです。然し今何を書て居られます。さればサ是は博徒の事だ。イヤ、博徒と云へば難波邊の淨蘭の事ですか。左様さ。イヤ夫で願ひ下た何ぼ私が病でも那の事許りの云いぬれ先生も好加減にお止なされ迂闊とすると撲殺されますぜ大怖いくと慄氣を震つて後退りするもゑコレコレ其様に怖がる事もあるまい何ぼ無法漢でも其身に暗い事があれば人に何云はれても詮方が無い譯若し又た書た程の事が無ければ公明正大誰に向ても恥る事無ければ怒る譯も無らう況て世間に面役とか任侠とか立られるものが些細の事で腹を立てる様な野暮も爲まいマア左様なに案じる事い



無い産が安いとやらだ話しなされ笑史も其氣でそろ／＼と書きませう。然し先生貴方の仰る事は親分株の者の考へその私も同様ですが乾兒の中に向ふ見すの勃ッ腹立ちが随分あるもろ斯な事が聞えたら親分の顔へ泥を塗るとか何とか彼奴等が定文句があり私の夫が怖いと云ふのです。成程其心配も無理で無ければ何の誰と云ふ者は箇様々々の悪事を働いたと名指して云ふで無く只斯奇人物も間には有るさうだと云た許りで誰も怒る事出来まい。如何さま先生の仰る通りなれば夫で一才と内緒で一ツお話しませう。左様か然らば笑史も内緒で聞ませう。ドレ話しませう扱て是も難波邊で顔役と立られ人に頼まれた事なら五分でも引ぬと云ふ強ひ仗氣の人と見込んでわへい免下さいとて往た女は島ノ内の藝妓で而も有名な別嬪年齢は今三句に成るや成らざるの事なるが横から見ても壁から見ても二句の上を越すや越さずと離しら齒の雪の膚一目見てもへ慄とする程うつくしいとも奇麗とも譬ん物の無き迄に評判高き小何と云ふが親分と見てナトお頼みがあります妾の斯云ふ旦那に身を引され嫌と

の思へとお金も余儀なく今日まで辛抱したれとお金があると思の外旦那の借金で毎日々々諸方より催促に来る蒼蠅さも嘘八百の言譯さへ云ひ盡して無きものから離縁として頼めども強てと云へば生しての置ぬ杯と無理云ふにぞ觀念したいと思へども何うマア夫で居られませう底で親分に口を利てお貸ひ下さいと扱こそは今日フト参りましたと信實だちて云ふ面差をつく／＼詠めて親分が成程夫の最もた今時そんぢ分らぬ奴がある筈のもので無い其しく己れと見て頼みに来たなら口を利て其縁の切て遣うと受合た魚ご、ろわれバ水ご、ろお禮と申して何さ別に心配の入ぬ事よと獨りホク／＼點首て是より其藝妓を己が家へ占懐不發乾兒を逃て旦那の家へ無作法にも遣て往き強族で説き威嚇で論し遂に理不盡にも離縁を取り締たうへで斯と告れば藝妓の喜び云ん方かく親分信實に有り難う存じます是れ雁の心許り何れお禮の縁りと云せも敢すコレ／＼小何さんイヤサ小何ソリヤまた何した譯た亭主に禮どの世間に聞ぬ訝な洒落をするで無いか初めお和女が頼みに来たとき魚ご、ろわれを水ご、ろと云た



事の分らぬと云ふ野暮な女で、有るまいと大金を出して引せて呉た其旦那の手を切たからにや己れの女房にまやらの了簡さなくて何は男氣でも無慈悲な頼みを聞く筈の無い事の最初より分て居るども不知顔れ逃げやうとの水臭ひイヤサ泥臭ひ稼業をしなからソナ粹の利ぬ女が何の國にあるものかと飽まで強臺詞にあふられて返す言葉も中々に胸のみ痛めて居たりしが流石の泥水で育ちし丈け其場の体能く云ひ通れて無事に我家へ歸たが其後も度々返答は何だぐと迫り立られホトホト思案に盡たるにぞ百圓を手切金に出すも誰か仲裁に遣入て呉る者のなきやと内々割ねて居ると云ふが相手が相手もる誰ありて己れがと云ふ者も無いとの事そも此顔役と藝妓どの如何なるものにてあるやらん先生一寸と當てと云ふとさ下婢が破襖を瓦落離と開けへイお茶が入りました。吁喚一驚矣

第十五 観物

観物の種類は殊に多くして是と云ふ定り無く時々其新しき趣向を示すなれども大抵二

度吃驚なり二度吃驚どの何ぞや小屋の入口に掲げたる看板と鳴物音曲の面白さに吃驚すれパツイ心を奪われ迂濶と木戸錢を拂て覗て見れば河童が尻はどの事もなければ是の詰らぬと此で又た吃驚す是を名けて二度吃驚と云ふ閑話休題と云ふ南地の千日前の観物小屋の軒を並べ左右に隈なく見えたれども看板に偽り無しは甚だ稀なり唯り手品。足袋。輕業の観物の冠たるものにて廿歳前後の牌肉肥太り恰も相撲の如くにして素裸体に緋縮緬やうの褌と掛けたる新造が右手に輕々と四斗樽を差上げ左手に扇子を披いて居る看板を見ては是れ二度吃驚と知らざるべからず猿の観物の看板程面白く無しと雖どもキヤツキヤと腹も立れまじさるにても樹木の生茂り盡猶ほ小暗き山間のあなた

の崖より大蛇がニョッキリ首を出して口を開き容貌よき若婦の斯と見るより進んとして此方の岩角に躓きて轉ひたるまゝを呑んとする其景状を畫きたる看板の懸れるをト見ての往く足を思はず止て見るども無く中の様子を窺ふ處に早くも木戸番のそれと見て取りサア〜這入ては覽じろ木戸錢の僅か一錢で今度天竺より送るぐと日本へ獲



へて來たる蟒蛇なり是なる看牌に掲げたる如く無慈悲にも可愛想にも彼の様な優しい別嬪をアグリと呑んとする世にも恐しき大蛇の觀物サア何方も這入ては覽じろ杯と鉄切聲を振立つ、手招きして止ざるもの見ても極めて面白からず只近日象の觀物が出で來て他の觀物を壓するの評判どりくくなり是ぞ之れ天竺よりも渡り來るならん亦た見て損無ければ果て看牌に偽り無しと云ふべしさて二錢の木戸錢一錢の中錢は少しも惜ひに足らねど三錢がたの焼芋の食つて一回の食事に代用すべし日進開化の今日にして針を挿はどの虚を飾り實を詐る所業もて生活の糧を需めんと拙くも計るなる興行師よ注意すべしそれ人にして象に若ざるべけんや

第十六 花街

我が大坂の花街の都て六遊里とす新町。道頓堀。北野新地。松嶋。新堀等にして新町の娼妓の上等者ると以て鳴り道頓堀。北野新地の娼妓を以て鳴り松嶋。新堀の娼妓の廉直なるを以て鳴り堀江の娼妓とも別に風味あるを以て鳴る扱て此六遊里の外にて唯市

中各所に町藝妓のあり築地の北濱。御靈裏等の中に就て最も盛んなる所あり扱又新町の往昔天正年中より民家建續き海船の要津なりければ着船の所々には花魁の家あり然れども當時のまだ野原なりけるを寛永年中初めて傾城廓を此地に設くべき事を許されしに遂に諸所に在りたる花魁を此に集め田圃を開きて新に町とせしに世の人これを新町と呼で終に柳陌の惣名とはなれり折ふし伏見浪人の願に依りて木村亦次郎と云へるもの官より花巷の長を勤めさせらる此者瓢箪の御馬印を拜領して常に玄關に飾り置ければ通筋を瓢箪町と云ひ居宅の町を亦次郎と呼り又佐渡嶋與三兵衛と云ふもの上博勢に在りて當時今の地に移り開發の由縁に依て佐渡嶋と呼べり此西を越後町と云ひ佐渡越後と國双の故あればなり吉原町の北天満吉原町より茲に移れるも舊名を呼んで町名とせり佐渡屋町の船場高麗橋筋の佐渡屋某と云ふもの此廓を開きし打餘りの地を故ありて拜領一丁一屋敷として住ひけるに佐渡屋町の名ありし其次を九軒町と云ふ初め玉造の九軒茶屋を引移して名とせりとなりそも此津は海船幅濶の地なれば昔



しの江口神崎も此に在りて長柄の傘に高足駄紋日の道中身請の門出一笑千金の花の囁  
より二千里の月の夕べも蘭麝の薫り濃かにして歌舞の聲糸竹の音洋々たり昔し此廓に  
総角夕霧吾妻松山など云ふ花美全盛の太夫ありて世に名高し初め此廓の大坂三郷の西  
端にして田園お積さしに後世次第に市中の蔓り今は難波津の中心といふありぬ故に略し  
て中とも云ふとど一に六遊里と云ふとも唯り新町は眞の傾城廓にして其由緒も此の如  
く深けれども物換り星移り今の昔しの姿全く太夫轉進の號廢れて満太園となり隨て其  
艶美なる品格も亦た落たり併し此廓の昔しより遊女に名あれを今も花街に遊ぶ嫖客娼  
妓を云へば此廓を以てす但し満太を上等娼妓と呼で園を下等娼妓とす園に數種あり赤  
襟若中詰中詰前帯是なり只見る満太の常に帯をぐるぐ巻にして大道日穴を隠す  
狀なければ園は藝妓の風を擬すれば却て見悪からず然れども満太と園といこれを同日  
に語るべからざるものあり例へば満太の線香一本を十二錢五厘とし客の聘するあれば  
送返二本となり其一夢を結ぶの後も一本を増す是より一夜を徹すに尋常一本の價にて

推す又た園は線香一本六錢にて送返五本なり其餘は是も尋常一本六錢にて推すものな  
り満太茶屋と園茶屋とい素より別ありて客の満太茶屋に遊ぶもの園を呼ぶ事を得れど  
も園茶屋に遊ぶもの満太を呼ぶ事を得ず猶ほ此廓に藝妓のあると多ければ満太茶屋  
に出入る藝妓と園茶屋に出入る藝妓とい是又た別ありて園茶屋の藝妓満太茶屋の招き  
に應ずる事を得れども満太茶屋の藝妓園茶屋に至る事をせず満太と園の懸隔の此の如  
く其れ遠し但し此廓に遊ぶの嫖客三種あり一は満太一は藝妓一は園を買ふものなり満  
太乃至藝妓に浮る、もの中以上の人物なれども園に現を扱すもの多くの書生輩の懐中  
に限りあるものなり最も此廓の娼妓を以て鳴れば藝妓は品格落てこれと道頓堀。北野  
新地に比ふれば宛がら主従の別あるに似たり近來府下の人々の往々にして南北両地と  
此廓の藝妓とを併せ聘ふ事あれども其互ひに吳越の思ひありて却て興なし併し藝妓  
虫も好々にて此廓の藝妓に迷ふものは矢張り若干の枕金を投じ猶ほ其乞に任せて巨額  
の金員を棄て顧みず斯ても此廓の娼妓がこれを怪まずして其春を鬻ぐの妨げとなるを



答りざるの昔しよりの習慣なる故か尤も娼妓には其檢査を避ん爲め店へ病氣と披露して密に狎客を家方に招く杯する弊あれば互ひに其非を隠し合ふものと見えたりト云ふもの、是等の弊の唯り此處に止まらずして外五邊里も亦然り而して道頓堀の藝妓を以て鳴るなれば娼妓の全くこれに次ぐなり但し娼妓を呼で女中と云ふの蓋たこれを卑めるの言なるべし此地の都て五花街にして道頓堀川を狭みて南北に五町あり川北を島ノ内と稱ひ宗右衛門町と云ふ川南を九郎右衛門町〇梅町〇坂町〇難波新地とす島ノ内の藝妓の自然にして上等と呼れ九郎右衛門町〇梅町〇坂町はこれに次ぐものとす又た難波新地の藝妓は是より一階を下るもの、如くなれども酒席の間にての難波新地の藝妓能く客に勤むるの風あれば却て座興あり宗右衛門町〇九郎右衛門町〇梅町〇坂町の藝妓ハ上等なる故か知らねども勤むる事至て藝妓さへあるに中に客に挨拶を爲さず先づ茶亭のお家に向ひ姉はん今晩のと云ふのみにて座に就くが否や帯の間より懐中鏡を取り出し下さらぬ顔色を良暫く詠めて粧る事なごあるの一夜の中に何十何度と數ふる

程なり偶々止すかと思へば只黙然と構へて煙草を燻らし乃至物を喰ふ外の所作なく丁るもあり殊々時分を計り己れが喰んと欲するものを乞ふの風あれば或る時の雛人形を見るの思ひえ或る時の意地不潔さ不行儀の女に出逢ふたる思ひして止す是のまた大坂花街の藝妓一般に就て云ふ事なれども客の座敷に呼れて唄ふ事も藤八拳も知らぬものあり蓋し道頓堀五花街中にも随分其者に乏しからざるは藝妓を以て鳴るの土地にも似合しからずして不都合千萬と云ふべし左れば異郷の人時々これを疑ひ何で藝妓か杯と笑ふもの掛なからねと元來大坂の藝妓の始めより藝を以て賣るにあらず只亂轉の能く客が氣を取る一藝あるのみ故に座敷で唄はず又た藤八拳さへ知らぬも理りなるべし尤も亂轉の一藝あれば以て一端の藝妓として通るが此地の習慣にて且つ味ひある所なり但し舞妓は能く舞ひて閑麗なる状あるの格別なれども地を曳く藝妓が唄ふさま又た引く三絃の音調悪くて聞れぬぞ憶みなれ最も嫖客が藝妓に纏頭と呉るでもなければ擺撥なものおれども十二錢五厘の線香を積み鳴鈴後をも加へれば纏頭位の操作をした



も同様なるべし但し娼妓の春を隔ぐの定に娼妓に異ならねど枕金十圓に十乃至十五の揚(通常線香の二本に當る)をせしめ猶は別に月定と稱ひ毎月五圓乃至十圓の給金を取る娼妓あり是は唯り南地のみならず何れの遊里にても同じ事なるが爰にまた一ツの異風ありそは娼妓が朝歸りに駕籠の迎ひありて客の爲に買れて泊れる娼妓の乗るものなり甚だ贅澤に似たれど其實の然らず只古來の因襲にて停る事の出来ぬ故なり若しまたこれを停ん時の忽ち生活を失ふものありとぞ其話扱置娼妓が鳴鈴後を賣ると云ふ事の詰り線香を澤山賣るといふに似たれども其實は然らず鳴鈴後を買れ客と雑魚衆を爲し或の筋に春を勤めて冥々裡に楮幣をせしめる娼妓あり或の其間に訝な氣を見せて遂に公然枕を附さずる娼妓あり是れ大坂の遊里に鳴鈴後の特例ある故なるぞかし宜なるかな大坂の遊里に娼を以て賣るもの甚なく只能く春情を賣鬻するの整風依然として去らず併去是の古來よりの因襲なれば大坂の遊里に娼妓となるもの此事おくては立すそを如何にと云ふに廓の交際費其他種々の出費且の衣裳且と諸雜用最も此地の娼

妓は何れも道樂ありて多く俳優と相接し若干の金員を投るものあり但し一回の散財僅少とも十五圓以下に出すとぞ聞えし仕合なるかな俳優其者よ同じく男子にして客は娼妓に金を遣り俳優は娼妓に金を貰ふ嗚呼幸不幸の懸隔一は何ぞ此に至るや却て説く娼妓の道樂なるの最も南地に多くして其他には甚しと云ふそれかあらぬか知らねども兎かく南地の娼妓の生意氣にして彈返多し北野新地はこれに反し全体より云へば娼妓いなべて従順き風ありて座敷にての勤めも餘り怠らず殊に土地の狭く且つ南地より娼妓も少なければ能く粒の揃ひ所謂佳人多くして何となく卑からぬ風あれバ筋に遊ん人々の重お北に多し此地も亦た娼妓を女中と呼び南と同じく卑しめるの風あり又娼妓も娼妓も是と云ふ程の瑾も無いが扱て善くも無く悪くも無しと云ふの堀江なり此地の娼妓の何れも追分節を能くす只青樓の散財の聊か不厭なるが如し娼妓の線香一本は六錢にて娼妓は二十錢なり新町廓に近けれども連夜相應に賑ひ他の遊里にも劣らず松島は素と新開地にして明治五年に今の廓里を開く店附にて娼妓の部屋持なり線香は廿



錢にして泊込八十錢とす然れども客のまれば直減れば幾分か負るにぞ重に下等社會の  
 遊興場となりて中以上の人の先づ往ぬ方あり此廓に遊ぶもの更かく相妓を換るの風  
 ありまれば名けて箒と云ふの掃掃との意なり新堀は娼妓の藝妓を兼るものにて兼帯鑑  
 札を持って此遊里に遊ぶもの船乗多しと云ふ蓋し船舶出入の要津に接すればなり扱て  
 爰に一奇談あり藝妓が費す所の玉紙と一貫目四圓五六十錢の價ありとなり但し不流  
 行の妓にても一箇月の費用高は凡そ一占より少なからずと盛んなるものと云ふべし  
 案下再説新堀の娼妓が藝妓を兼るの故に就て古へを考ふれば藝妓兩妓の素と一に  
 出たるものにして彼の白拍子と云ふに濫觴すべし白拍子の人皇七十四代鳥羽天皇の御  
 宇とやすに落陽に島ノ千歳和歌ノ前の二女ありて但に踏舞を善くせりけるが朝詠に合  
 して能く女樂と爲したりし是を白拍子の起源と云ふ亦た是れ遊女あるにこそ遊女に  
 女郎の號あるは古へ上臈と呼ぶが宮女に嫌ひあれば女郎と改めたりと云ふ往者白拍子  
 の名たよるを問ふに彼の清盛の寵愛淺からざり玄祿王祇女乃至佛御前又た義經の妾靜

御前も白拍子の開え高しなんど云へば皆な是れ遊女と呼ぶべくものにまて今の藝妓と  
 同じなるべし一説に白拍子は歌舞妓役者の水元とも云へば上古は是又た一に出たるも  
 のと見えたり斯れバ大坂の藝妓が娼妓と經庭なき舉動あるも左のみ怪むには足らねど  
 も道頓堀。北野新地の藝妓等が殊更に娼妓を卑め併せてこれを買ふ容までも下むの風  
 あるは最と憎むべき事ながら其藝妓が娼妓と同じ状あるに就て客にも都合好き事あり  
 と云ふの前にも粗ぼ云ふ如く店には内緒にて青樓との間に私を行ひ藝妓が内職を働  
 く事にて枕金も揚も月定も無く只少額の金員にて承知すれば是を一木齒の下駄と云ふ  
 容易く轉ぶの意なるべし併し青樓の上等なるはこれを爲さず尤も此媒介を專業の如く  
 爲す青樓ありて各遊里とも趣なからずとなん猶ほ此他に盆屋と云ふ貸座敷ありて私  
 淫を媒介す此家に妓婦多くして客のこれを携へるものに便す是を盆を貸すと云ふ故  
 らに家を薄暗くして如何なる處女にも入り易く兼て又た入口に階子ありて直地に二階  
 へ上るの趣向なり左れば素人の男女が濫りに顔と見られ耻しき思ひする事もなし是も



素と妓婦が内緒の低に備へたるものなれども近來の妓婦の類の性なりて却て素人多  
と云ふ併し盆屋の事は餘り詳しく記さず盆屋離此位に止て置くべし底で花街の青樓と  
置妓屋との關係の亦た特別あるものにて各遊里とも皆其別あれども大抵青樓の利得の  
多き割合にて例へば十二錢五厘の線香の端錢を廊内の女紅坊費に引去り残る六歩を妓  
の實入とし三分を青樓の利得として一步の置妓屋の收入あり何れの遊里も大方の斯な  
割合なりと云ふ左れば青樓は中々の實入なるものに似たれども一利あれば一害あり置  
妓屋の其利得の少額けれども左る替りに必らずこれを青樓に請求するの權あり青樓  
のまた客の拂ひなくとも置妓屋には必らず拂ひざるべからず故に間の悪くして客の拂  
ひ無き時はこれを立替るなり若し一日にてもこれを忘れれば遊妓を送らすして行燈を引  
するものとす斯く仲間規約の嚴にして毫も仮借する所なければ青樓の重荷も亦た思ざ  
るべからず然るに大坂の習慣として何事も月拂乃至節季拂にて月末若くは二箇月拂な  
れば青樓の鬼かく貸倒の悔あり但し一現茶屋と云ふありて現金拂の青樓もあれども此

地の風習として是を等外青樓とも呼び傲し品位遙に下れり案下再説前にも云ふ如く通  
常の青樓の何れも貸すものなれば遂には貸過し催促を遣て見ても家婢の勞は足に豆を  
生じ裾を切しても何時も留守で埒明す果てはか家が自身に出で往くも店で丁稚か家婢  
が取次ぎ旦那は只今一寸と不在と云ひては腹が立ども空しく歸るより外なし乃至一  
錢の葉書二錢の郵便切手を催促の爲に費すを算ふれば年中に積りて利得の一步を欠く  
事もあるべければ扱て年中の利得の小さくあかるべければ損耗も多かるべし故に割に  
合ひさうにて合ぬもの青樓商業ならん殊に近年の遊客も客齋となり成るべく金錢を  
遣りぬを得費とす昔し遊客の金錢を湯水の如く遣りぬれば通人とは云れず又た自分も  
耻しく思ふたれども今は遊里にてさへ芥の如く金錢を遣へばこれを怪しみ密に警察署  
へ訴へ出で猶も陰にて舌を出す位に事總て變りたれば堅固青樓にては精々無益の散財  
を抑へ所謂積上の弊と甚だ甚だなさに至りたり但し一は不景氣の今日に拂ひの滞るを  
恐れてあるべし爰にまた最も輕便なる散財話あり新町の圍に現を扱す一貧生が學業の



餘暇に學資を割て時々其情を慰め居たりけり或る時の事あり正午少々過る頃かよ葉書を出して何やら認め下宿の家婢に命じて郵便函に投げしむる時フト名宛と見れば新町堀側某樓の名宛あり「君只今家婢に渡したる葉書の何れへ出されしか僕解自か知らねどナト解し難い所の様に思はれたり。イヤ先生只今のをば覽じたかソレは閉口の至り然し斯く願ひれしうへに隠さず打明そへま僕實に此程より新町に遊べり然れども貢生の身奈何とも成り難ければ遊びとて圍に馴染を重ねたる位なり併し圍と云ふと雖も一夜を契らんにの中々力およばず六錢の線香に送込五本其餘尋常一本と以て推せば圓以上となる猶は宵より往々直に寐床に就く事も成り難ければ酒を呑むか乃至寄席に往く事を勧めらる酒を呑み高く寄席に往くは低しと雖も茶に菓子に木戸錢を併せての敵妓と外に家婢の附添あらんおは是又た無益の失費なり底で只今の如く葉書を遣し置き敵妓を今夜十二時より仕切るべく依頼せり扱て是より十一時頃まで勉強し夫より往く事とすれば學業の妨げとも成らず且つ失費をも省く是れ一舉兩得の策なり斯て十一時

を聞て出掛る途中夜臺店の養育酒屋に立寄りて芋の揚物や乃至鯛の養附で二錢方の酒を呑み又た或る夜臺店の餅屋にて一個三厘の餅菓子も三錢方も買ひ是を袂に入れ夫よりヒョウ走りに青樓の近邊まで走る走れば二錢の酒廻りて乍ら酔ひ舞と面見す底で青樓に入れバオヤ旦那好いお色でと云ふを聞くま、二階へ上る今日の圍らす酔た程に酒も菓子も入ぬ但し茶を入れて貰ひたし幸ひ此に貰ふた菓子ありと例の三厘餅を出す此く計れる時は娼妓の線香の僅に十二時後のに過すして一回の愉快を買ふを得る是れ他們貢生の遊興にこそあれと語りたり斯る遊治が近年の流行ゆる青樓も中々利得るまじ併し斯な連中許りも無ければ南北の藝妓が一月の紋日に揚を賣附ると夥しく殊に南地の十日蛭子北地の廿五日の初天神へ寶惠駕籠の參詣ありて無益な散財を客に遣ひするの風習の年々歳々變る事なく亦た格別なる景氣なり但し寶惠駕籠一挺の圓以上にしてこれを數多く出す客を上客とす又た流行妓のこれに乗て參詣せざるを恥の如く心得たり只可笑きの一挺の駕籠に十數人の昇夫ありて中に道化に藝妓も打交り寶惠駕籠々々



々々々惠來紋蛇々々々と呼べる状の今に始ぬ事ながも野蠻の習氣を帯て抱腹に堪ず此他新町の藝妓か田植式を行ふとて年々五月廿三日に住吉へ詣づるの珍事あり此日は廓内大賑ひにして亦た南北にも譲らず何が扱て大坂の藝妓は娼妓より甚だ割合の好く最も亂轉の其事興りて大いに力ありと云ふべし杯と餘り藝妓の穴探に實を入れて却て數蛇の恐れあるも知れねば好加減に筆を擱くべしとフト考ふれば藝妓の穴探に數蛇の恐れありとは思附なるべしと笑ひつ局を結ぶにふそ

第十七 祝融實況

鐘樓ヤンと報ずればスハ火事よと人々動搖くは何國も同じ事にしてヤン火事は何所だソレ火元の何地だと東阡西陌より馳廻り馳廻る形状は夜が夜半でも白晝人の走るに異ならず向鉢巻に火事置を首にし縫糸伴天に縫糸股引首縮足袋に草鞋掛け左手に提灯を高く差しハローと乗馬を透ふ音吐を遣ひつヌクと馳行くは是れ東京の火事場の打拵なり又た火事の何所でおます火元の何地でおますと西の辻東の筋より袖長

に下駄掛け由良之助の宵鬼同様手拭を額の方より後へ廻して占めノコノサイと出掛るもの、是れ大坂の火事場の打拵にして常にこれを見ると掛なからず祝融亦た心あるにや此人氣に相應しホヤと當も無く空に燃上る燃上りて小一時間も煙を火消人夫其他の者の漸くに駆附れば祝融も是より隣家にソロと燃移り粗方家財を出し了れば頓て火の手も大きく成る杯と口善惡なき人の言の葉なれども中にハ擺撥な者もありてコレとそんなに逃てるハ逃てた所が焼るものなら詮方が無い鹿相で出またお方の罪じや吾等の知た事での無いと云ふを聞き咎めて何をボンと云ひなはる此所の火事場じやぞへ火が見えておます水でも廻さんかへ。怪体な方やナ私も目がある火事の知ておます黙止て居やれ。イヤ黙止て居られぬ杯と云ひ争ひが始まりて果は是より手を舉れば彼よりも亦た手を出去打ば打ち組バ組み夫より火事を餘所除の立廻りトンパナの相柏子こそ無けれ間の振た喧嘩に小半時も經てりと覺し頃漸く仲裁が入りコレとお前がた双方は何をしやるのじや其手を離しやれ此手を除なはれ



火事の消たど共にお前がたも鎮つて下はれと云ふを聞いて二人の驚きハ、ア火事の最う消え去したかつい喧嘩に質が入て函圖と火事の事を忘れて居ましたたが火事が消えたら此喧嘩も灰にしませう杯と滑稽で仰直りすると云ふ昔しは消防夫の火掛りも見られねを懸印にも格子にも何の爲か土砂が入てあり振たり持たりする毎に土砂々々と音がするも可笑かりしが今の昔しと反對にて消防夫より火防道具の西洋流の唧筒まで揃ひ一月の出初式よりいさ火事場の火掛まで悉く開化し東京と異ならずなりたり是れ必竟府尹の殊に火防を重んぜらるゝの賜ものなるべし去りながら猶ほ消防夫の中に兎かく古風な身装をするもあり恭しく陣笠を冠り番様で見た手卒に似たる杯は可笑し其話兎もあれ祝融も近年の中々の大火あればナト發揮々々火掛を遣て貰ひたい杯と神經質の憶病深く。漸危時は人を當なる。焼原の銅壺より。喧まぐ人の火を。貰ひぬ先きから彼是ど云ふ奴かちと飛火の様な。小言でも喰ぬうちの穴探も此邊にて。眼に見た事も火の要心に。何も水として置くべし

第十八 密賣淫

軒相接し家相並ぶ而も稠密熱鬧の地に往つ戻りつ深ひて往來人の袖と引き袂を扣へて且那モシお浮れあれかしと勤むるもの。是なん千日前近傍にて見受る所の密賣婦に去て橋の那方より此方へ立廻り同じく往來の人に觸れ密に淫事を誘ふもの。下大和橋近傍なるトある暗所にイみ居つ東汗西陌を見廻して往來人毎にそれと云ひ寄り此方へと引くもの。是れ土佐堀近傍にして何れも密賣婦と云ふものにこそ但志當地の密賣婦の土妓の流れにして昔し天満に名高き。傘枕の血統なるが飯の上の蠅と同じく此方で逐バ彼方に顯れ現今警察の厳しく能くこれを捕らるれども隠出沒宛がら鬼神の如くなり扱てある冬の日の没り早く初夜告渡る鏡ならで太鼓の音のドンくと聞えるもの。から往來の未だ途絶ぬを槌り戸や雨戸をたたく風の音身に染みぐと答へつ、寒い晩だど獨言つ往ての方より緑りの香雲に光澤高く白菓の壁も宜しく申を顔の白粉に頭の映ひ折ふし吹き来る風どもぐアンと香るに吃驚し思はずして只見れば左のみは憎から



ぬ女原が彼方より此方へすり寄り莞爾と笑みつ、密と引く袖の下袂がくれの手綱さへ何時か多少の縁なれば意馬心猿立どころに狂ひ初めての中々にそれと曳る、隨意の情の露の末果敢なさまもまら川の夜船の夢それかあらぬか濡然と結ぶ雲雨や悪かりなん頓て件んの女の起き出で旦那おまくらを敷してと云ふも此方の氣が附す何に枕の此にある。イエ旦那其まくらではおまへんがナ。何に此枕でない夫じや何の枕だ。アレイヤ旦那は分別ませぬか妾の云ふまくらどのお金の事と云ひれて此方は吃驚し扱の和女さんの密賣婦で有たかど今さら氣が附も遅かりし山真之助其助の字が身を賣て是非とも楮幣は貰ひます誰が無價で肉饅頭を振舞ふ阿房がありますかへと果は悪口雜言で聲高に罵られ世間の聞えもよからぬと風呂の歸りに彼此と一寸と茶見の道すがら訝しいとは思ひあがらも迷つた尉が靨面に顯はれたのか折あしく懷中に一錢も無く何と思案も尽き果て小首を傾け考へ居る折から得知らぬ男の來て胡座をかきつドカと据り扱て女に力を添へヤイ手前も素切で遊辭るも程が有る早く楮幣を出せば好し出さねば其

分にして置ぬぞと敦固あらく罵り騒ぐに此方の愈よ驚き或ひイヤ遊辭ると云ふ次第で無ければ斯な事どの夢にも知らず殊に風呂の歸りも多懷中には一錢も無く寤に面目もあい仕宜と只管談れを聞き入す其拂ふべき楮幣が無ければ着て居る衣服を置いて往けどの權もほろ、の挨拶なり是が世に云ふ地獄かやそれかあらぬか荒男の鬼々しきの憎けれども此で彼是ど水掛論の果し無く云ひ争へば閻魔の應のそれならねと遂おの其筋へ引立られ針の山おでも登つた様なナクく刺さる、思ひして血の池地獄に投りでもした様な顔をするも心苦しき事なれば八苦の責の艱難を忍ぶ思ひをする事なら着て居る衣物を脱ぐの安し安きを棄て難きを争ふは身で身を賣る業晒を自分より招くに異ならず然なりくと已に問ひ已れに答へて流々ながら衣服を脱て褌一枚着たま、外の方へ逐ひ出されブルく震へつ寒さ夜を暗に紛れてス々くと往く方のは是ぞ三途川をれどの死出の旅ならぬにトある川邊に來掛る折から橋の此方に閃々と光るの鬼火か角燈を提げられたる警察官それと見るよりコリヤ待と呼れて此方の吃驚し震へる足を踏



締めつ、問ひる、まゝ、に一伍一什を包ます白狀に及ぶと均しく警官には察置がたしと聞くがまに／＼と進みいで其所参るべし疾く案内せよかしとて伴んの男を先に立巻前の益屋へ赴きて遂に女を拘引のうゑ法の如く罰金あり若くは苦役に處せらるゝ、最後ともしら齒の不具つ女が盡く悪法の報ひに一生火の車で暮すなるべし嗚呼汝も出るもの汝に反る是ぞ此世の地獄にして名詮自証と云ふべきにこそ穴恐々々

第十九 歳暮實況

街衢喧器人織るが如く家々焚燈紅燭を燃す道は是れ歳華抄を告ぐ除夕の景狀にして居諸の匆々たるを宛がら鉄砲玉の飛ぶに似たり實に白駒の隙を過るに異ならずして歳月人を待す斯く年の暮なんする先きに甲の早くより煤箒を爲し乙のまた餅を搗く杵の音喧々煤箒の聲に和志何となく世間さめめく狀の何國も同じ年の暮なれども都會の地の別してまた風變りの人もありて暮も春も同じ様に思ひ金錢さるあれを何時も春なり杯と野方圖の考へを持って迂濶々々遊び暮すもあり殊に此類の大坂に多し因に云ふ府下

猶は乞食の所々に散在し袖乞ひの茶蠅を見るは是れ一は滑稽なるに生ぜるなるべし其話初置愈よ年内今日一日と云へば家々の人々の何れも且またる、心忙しく殊に商人の平生と違ひ大晦日の事にしあれば誰彼も皆な掛金の取集めに奔走す 除夜かか頻りにつくや嘘とかねこれかあらぬか入相の鐘にあらで借金取へいを免下さるコソコソの米屋さんに八百屋さんお揃でト云ふもの、家の人は只今出て往た程に歸りましたら此方よりと云せも敢ず米屋八百屋の異口同音にコレモシお家さん何時來ても同じ様な事許り仰ていの困りまど今日は幾日だと思召すか一年の終りの大晦日朝からでも参りはせぬ日が暮ての今頃ろ來てもまだ左様云ふ事ばかり杯と云ふても埒あかね又た後程と約してアツ／＼皆な怒つて出て往けバホツと一息附く折から又も入替て來るもの身装も小奇麗な新造おて旦那さまはお宅でふりまそかと言葉丁寧に聞えるにぞ此方の見慣ぬ婦人ぞと先づお前さんは何所よりと問はれて此方も黙し難くへい 羨の南の邊より参りましたの南邊とは何所でふりますか。へい旦那様にお目に掛れば分りますよ



一寸とお取次を願ひます。ハイお氣の毒ですが只今留守でムリです。お取次があれ  
 ば妾が伺つて置きませうと云ふを此方は打聞て、時思案の体に見えしが扱てあるべき  
 にあらざればそれではお歸りがムリでしたら是非一度今晚お出で下さいませう。屹と  
 仰て下さいませしと云ひ棄てソコへに出で往ける左らぬだに女性の兎かく妬しく思  
 ふ心の常なるにぞ疑心暗鬼の女房の忽ちそれと附附て見た事もない彼の新道が南の邊  
 と許りにて案さへ確とも得云のね。蓋た花街の女であらう是非とも今晚と云ふから  
 は何か深い仔細もあらんナエア亭主も聞えぬぞへ杯と頻りに氣を揉で居る女房の心  
 も汲年越の祝ひじや杯と彼此に飲み廻り何せ足ぬ勘定なれば借金取も、駕の聲と素  
 顔して家にも居られねばと同伴を幸ひに車を飛ばし或は南乃至北みな思ひくの散財筋  
 そこで除夜押通の元日朝歸り是の之れ俗に云ふ燒氣散財にして一時を苟偷する姑息の  
 計略なれども元日早々の素より二日も三日も一月の事なれば如何な借金取も催促に來  
 ずと見込での豫防散財とぞ聞えし此流都下に行はれ近年また專ばらなる由なれば穴探

中の一珍事ふこそ歳暮の代りに斯くのしつ

第二十 雜感

善を善とし惡を惡とす是を直と云ふ暗に其善を賞し亦た其惡を稱ふ是を諷と云ふ諷言  
 直言の共に人間社會の利害に去て之れ無ければ世道頽敗し人智滯滞す笑史と、に穴探  
 第十九項と續れるも亦た全く此意に出たるに外ならず而して今又た雜感一事を記す諷  
 者幸に其意のある所を見誤ると勿れ

コレサ足下の話す事の何だか笑史に一向に分らぬ靜に最う一回話して見なされ。  
 へい、夫は何度でも話しますが私の云ふのは大方附留と申す事で府下の金満家  
 達が我々の代人となりて或る講釋堂へ寄集り今年の何所其所の家の屋根が漏るイヤ  
 桶が落掛て危険からこれを修すが好るべし然れば昔が三分で進が七分の割合なる  
 べし併し木の矢張り銀杏の割合を可とすべしと云へば外の妓員は其言葉が痛に障る  
 とてこれを駈て云ふ只今難波妓員が銀杏を可としたるが是は寔に宜く無い事も又弁



淫は飽まで情痴美淫の威拳に散財す杯と贅澤の爲質調法を定ると云ふ相談は成る丈  
 け早く終ふが宜いに今年醜妓淫が慄々嫌疑を出しそれが爲に三十七日間打て落た  
 と色々悪く云ふ者もおますが是はまた如何した譯でふりますか云事でありませすの  
 サココソコ左様な事由の分らぬ事を何時まで饒舌て居る馬鹿があるものか併し誰  
 書百通義自から通すで度々聞き直した所から足下の云ふ意の漸々の事で讀たが全体  
 足下の云ふ大方附會とい大坂府會の間違で代人とい代議人にて議員の事なるべし又  
 た講釋堂とい堂々たる大坂府會の議事堂にて何所其所の家などと云ふ例へば府廳  
 警察署。監獄若乃至學校等にして府民の爲に設け置る、建家を指すものなりこれに  
 修復を加へ若くは新たにこれを建築するは人民の爲に欲くべからざる事にして之が  
 爲に費す所の金額の區の人民が三分郡の人民が七分とすること割合相當なれと云ふ  
 議なるべし足下の云ふ苦が三分運が七分杯どの間違も亦た甚だし殊に本は銀杏を可  
 とす杯どの途法も無さ失言あり是は蓋た僕は原案を可とすでも云ひたる事ならん

然るに其言草が癩に障るとてこれを駁るとい亂暴の言ひ狀決して癩に障ると云ふ譯  
 での無く只其説に同意すると能はず且つ原案の不可あらばとてこれを駁撃したる事  
 なるべし又た難波妓淫とい一向に分らぬが是は何番議員と云ふの誤聞ならん奔淫と  
 の本員の誤にて情痴美淫の常置委員なりこれが威拳に散財せると云ふの其意見を  
 賛成するの誤あるべし又た贅澤の爲質調法も大間違にて是の税高の支出徴收ある  
 べし然るに今年醜妓淫が慄々嫌疑を出しそれが爲に日敷三十七日間打て落た杯と  
 の物を知らぬも程がある言草にて是の衆議員が府民の爲に思ふ所ありて續々建議を  
 出し遂に止を得ず定期日敷三十日其他七日の日延を乞ふに至りたる事ならん然るを  
 早く終らぬとて色々悪く云ふ者がある杯どの飛でも無い了簡達は足下などい以來左  
 様な失言を申してのならぬ第一云ふ事が皆な間違て居れば所謂無根の構造と云ふ  
 ものだサト口を嗜まれるが宜しい。へい〜其儀の畏りましたがソテ見れば私  
 の矢張り大方附會でふりませう

大阪穴探終



明治十七年五月八日出版御届

全年 今月 日刻成

著作兼  
出版人

大坂府平民

堀部 朔 良

大阪府下天満橋  
堂下日二十番地

定價廿五錢

賣弘所

大坂心齋橋筋備后町角  
吉岡平助

# 近日出版廣告

曲亭馬琴翁編次

柳巷話説 括頭巾縮緬紙衣 近刻

此書の宛久松山の説話にして馬琴翁の編次に係る今般弊店に於て定價發賣す尤も印行活字總て鮮明を旨とすれば刻成を待て一本を御購求奉希望候

米替笑史編次

赤穂介石記 近刻

此書の世間高下忠臣蔵の實録にして當時見聞に隨て筆寫したる書類を取集め編纂せるものなれば世に有り觸れたる諸篇とい同日にして語るべからざるの珍書なり

米替笑史編次

大坂奇聞 近刻

此書の明治五年我が大坂の獄屋を破て遁走し行商知れずと成りし有名なる強盜三田の脚吉と云ふが大悪謀を企てたる始末を詳細に編纂したるものにして當時の各新聞紙に掲載したる所は其趣を異にし未だ世人の知らざる所を記述せるものに係る蓋し

天保水滸傳にも譲らざるの奇書なり

米替笑史編次

近世賢哲叢談 近刻

此書は御維新前後より今日に至るまで朝野の間に在る諸賢子の金言奇語を纂輯せるものにして後進子弟の爲に大に裨益ある所の良書なり

米替笑史編次

全世界奇事録 近刻

此書は専ら全世界中の奇事異聞を網羅したるものにしてこれを讀で不思議の感を起させと云ふ事なく兼て又た土地人情風俗氣候等の各國大に其趣を異にするの甚だ懸隔あるを知るの珍書なり

米替笑史編次

歐羅巴太平記 近刻

此書の拿破侖第一世の歐羅巴を蹂躪したる前後の始末を編述したるものなれば其事實の普く世の人口に膾炙する所なりと雖も蓋し是れ近世類ひ無き良書なり



